
黒の組織との決戦！！そして・・・

ユーリ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の組織との決戦！！そして・・・

【Zコード】

N4629A

【作者名】

コーリ

【あらすじ】

コナンと哀は、黒の組織に捕まってしまった！！蘭達が2人を助けに向かうが、そこには悲しい結末が待っていた・・・

囚われたコナンと哀・・・新たなる新メンバー

夏のある日、1人の少年と1人の少女が米花町を歩いていた。

少年の方は、工藤新一・18歳。少女の方は、宮野志保・19歳。
新一「あれから、もう1年たつんだな・・・」

志保「ええ、あの事件からね・・・」

そう、2人は黒の組織との死闘に生き残ったのだ。
たつた1人の仲間を失つて・・・。

その犠牲者は、毛利蘭だった。

あの日、コナンと哀はいつものように、帝丹小学校から帰る途中だ
った。

あの時、普通に帰つていれば、「こんな事にはならなかつた。
そう・・・寄り道さえしなければ・・・」

それは、工藤優作と工藤有希子の灰原哀誘拐騒動から1ヶ月たち、
コナンと哀が恋人同士になつて数日後の事だった・・・。

哀「ねえ工藤君、この指輪キレイだと思わない?」

コナン「欲しいのか、灰原?」

哀「え・・・そんなつもりは・・・」

コナン「じゃあ、オレが買ってやるよ。」

哀「え?」

コナン「今日は、オレ達2人が出会つた日だからな。何かプレゼント
トしようと思つてたんだ。」

哀「工藤君・・・ありがとう・・・」

コナンは、指輪の代金をレジで支払つて、贈り物用にリボンを結ん
でもらつた。

コナン「はい、灰原。」

哀「ありがとう・・・」

哀は箱をランドセルに入れ、2人は宝石店を後にした。

まもなく、2人は人気のない道にさしかかった。

哀はふるえて、コナンにしがみついていた。

哀「工藤君・・・何か出そうで怖い・・・」

コナン「大丈夫だ、何が出てもオレがオマエを守つてやる!」

「? ? ? 「何が出ても、か・・・。それがオレ達でもか?」

その声に、コナンと哀はビクツとなつた。

その声の主は、まぎれもなくジンだつた。ウォッカもいる。

ジン「やつと見つけたぜ、新一、シェリー・・・」

コナンは哀を後ろ手でかばつた。

コナン「ジン・・・今日こそ、オマエとケリをつけ・・・」

ジン「フフフ・・・この人数に勝てるのか?」

コナンと哀はハツと辺りを見回した。

するとジンとウォッカ以外にも4、5人の仲間が立つていて、完全に囲まってしまっていた。

ジン「シードル、ボルドー、キュラソー、バーボン、アマレット。やれ!!」

ジンに名前を呼ばれた5人の構成員が、いっせいに2人に飛びかかってきた。

さすがのコナンと哀も、多勢に無勢だった。

抵抗もむなしく捕まれ、口にハンカチをあてられてしまった。

コナン・哀「ううつ・・・!!」

2人は気を失つてしまつた・・・。

その1時間後、毛利探偵事務所に電話がかかってきた。

小五郎「はい、毛利探偵事務所・・・」

ジン「毛利蘭に代われ。」

小五郎「蘭、電話だぞ。」

蘭「はーい。」

蘭は受話器を取つた。

蘭「はい、もしもし・・・」

ジン「毛利・・・蘭だな・・・？」

蘭「あ、はい・・・そうですけど・・・」

ジン「明日の午後4時、廃校になつてゐる聖学院高校に来い・・・。もし来なれば、大切にしていた子供2人が死ぬから、そのつもりでな・・・」

電話が切れた後、蘭は頭をヒネつた。

蘭「お父さーん、廃校になつた聖学院高校つて、どこにあつたっけ？」

小五郎「ん？ そうだな、確かに大渡間だつたと思うが・・・」

蘭「大渡間か・・・それにしても、子供2人つて・・・？」

小五郎「ま、まさか、コナン達か！？」

蘭「た・・・大変だわ！・・！」

その頃、ジンの愛車ポルシェ356Aは杯戸町を走つていた。ジンの車の助手席には、ウォッカが座つている。

ジンの車の後ろにいるのは、スバルだつた。運転してゐるのは、ジンにアマレットと呼ばれた女。助手席にはバー・ボンという男、後部座席にはボルドーという男とシードル、キュラソーという女が座つている。

ウォッカ「しかし兄貴、あの女本当に来るんですかい？」

ジン「もちろんだ。オレ達には今、人質がいる・・・コイツらを捕らえていれば、あの女の方からやつて来るさ。」

そう言つと、ジンは後ろを向いた。

コナン・哀「ん〜〜〜〜、ん〜〜〜〜！」

後部座席には、両手両足をロープで縛られているコナンと哀が寝かされていた。

2人とも必死にもがいてゐる。

2人の口には、声が出せないようにガムテープが貼られていたからだ。

いたとはな・・・・

1時間後、蘭と小五郎は阿笠博士の家に来ていた。

阿笠 なんじやと!! ハカン君と袁君が、誘拐された!!?

擲出、撲士一挺の響き。

阿笠「し、しかし・・・」

小五郎「しかしもかかしもありません!!」「ナン違か説掲されたん

小五郎も、いつになく真剣だ。

？？？「その話、オレにも聞かしてもらおうか？」

小五郎「平次君に和葉ちゃん……！」

蘭 - 一 純 (一) ?

和葉「つこちつき。平次が、イヤな胸騒ぎがするつて、東京に行こうって言いだしたんよ。」

さすがは西の名探偵と刑事の娘である。さらば平次達の後ろには、

園子と真まで立っていた。

園子「蘭！私と真さんにも、話してもううわよ！！」

蘭「園子！！京極さん！…どうして・・・？」

真「30分前、園子さんと店であなたを見かけたんですよ。」

園子「あなた、浮かない顔していたし、あんな顔見たら何かあつたつて思うわよ！…」

そのカンも、蘭の長年の親友だからこそなのか。そればかりか、なんと英理まで来ていたのだ。

英理「あなた、私にも話してよ！…」

小五郎「え、英理・・・！…」

英理「急に外食の約束をすっぽかすんだもの、何があつたんでしょう？」

英理もさすがである。

蘭・小五郎・英理・平次・和葉・園子・真「博士！…！」

博士もついに orete、やつとみんなに全てを話した・・・。2人が小さくなつた事と・・・2人の本当の名前・・・APT X 4869という毒薬が原因だという事・・・それに黒の組織という犯罪組織が関わつている事・・・そして、哀がコナンと両想いになつた事・・・全ての話が終わつた後、蘭が口を開いた。

蘭「そうだったのね・・・」

小五郎「オレ達の知らないところで、大変な事になつていたのか・・・」

園子「コナン君と哀ちゃんがねえ・・・」

英理「あなた、早く新一君と志保ちゃんを助け出さないと！…！」

小五郎「うむ、そうだな・・・しかし、オレ達だけでは数が少ない・・・」

平次「捜査一課に電話して、日暮警部達を呼ばんと・・・」

？？？「それなら、オレ達が呼んでおきましたよ・・・」

声がする方に蘭達が振り向くと、新一と蘭に似た2人が立つていた。

蘭「あなたは・・・？」

快斗「黒羽快斗と申します……それと、お供の青子です……」
蘭「わ……私にそつくり……」

青子「私達、米花町で買い物をしていました。そしたら快斗が、コナン君と哀ちゃんを見かけたのでついていて、塀の上からのぞいていたら、黒ずくめの男達が2人を車に押し込めて、連れ去つて行つたんです……」

快斗「すぐにオレが超小型発信器を取り付けたから、追跡はできますけどね……」

青子「前にコナン君にもらつていたらしいんですよ。」

平次「そうか、後は日暮警部達を待つだけやな。」

1時間後、日暮警部達がやつて來た。

日暮「毛利君、待たせたな。」

日暮警部の他に、高木、佐藤、由美が來ていた。

阿笠博士は地下にこもつて、何かを作り始めた。小五郎達は完成するまでリビングで待たされる事になり、その間に日暮達も真相を聞かされた……。

同じ頃、ジンのポルシェ356Aとアマレットのスバルは、廃校になつた聖学院高校に着いていた。

ジン「やつと着いたか……」

ジンはアマレット達にコナンと哀を運ぶように命じた。

アマレット達はコナンと哀を運び出し、牢屋まで連れて行くと、2人を中心に入れて、鍵を閉めた。ガチャリ……。

アマレット「30分たつたら、看守が来るわ。それまで、おとなしくしているのよ。」

そう言い残すと、5人は牢屋をあとにした……。

コナン「灰原、オマエ、ハサミか何か持つてないか……？」

哀「持つてないわ。他に役に立ちそうな物は、縛られた時に全部取り上げられちやつたの……」

コナン「ダメか・・・灰原、オレ達どうなつちまうのかな・・・？」

哀「ジン達の会話からして、明日の4時頃までは大丈夫だと思つの。でも・・・その後は・・・」

コナン「殺されるかもしない、か・・・」

哀「うん・・・」

コナン「灰原、ゴメンな・・・」

哀「え？」

コナン「オレがちゃんとした道を通つてれば、誘拐される事もなかつたのに・・・」

哀「謝るのは私の方よ・・・指輪が欲しいって、寄り道さえしなければこんな事には・・・」

哀「愛してるわ、工藤君・・・」

コナン「オレも同じだよ、灰原・・・」

縄でつながれたままで、2人はキスをした。

コナン・哀「ん・・・」

30分が経過し、看守が1人やつて來た。

「??」「食事の時間よ。」

コナンと哀は、あわよくばこの看守を閉じ込めて逃げ出そうとまで考えた。だが、この看守は変わった女だつた。なぜかこの女はコナンと哀の縄を解き、2人を拘束状態から解放した。

「??」「早く食べなさい。ジンが、何か食べさせないと体に毒だ、つてね・・・」

コナンと哀は、おなかが空いていたせいか、数分で全部食べてしまつた。

考えてみれば、捕まつてすぐに縄られて、2時間以上何も食べていなかつたから、おなかが空くのは当然か・・・。

コナンと哀は、少し赤面気味だった。

2人は食事後、すぐに両手を後ろに回され、手錠をガチャリとかけ

られてしまった。

「ナン」「これでまた、縛られた状態に逆戻りか……」

哀「うん……」

？？？「これからは、アタシが見張りを務めるから、逃げようなんて思わないでね。」

コナン「逃げるつもりはないよ……」

哀「どうせ逃げ出しても、すぐに捕まっちゃつものね……」

アーベルト「いい心がけね。アタシの名前は、風魔雷薙。フウマライチ」「コードネームはアーベルト。よろしくね。」

コナン「ボクは工藤新一……」

哀「私は宮野志保よ……」

アーベルト「フム……。でも、まさか本当に小さくなつた子がいるとは思わなかつたわ。ジンから、薬に副作用の可能性があるかもつてのはしつこく聞かされてたけどね……」

哀「雷薙さんは、普段組織で何をやつてるの？」

アーベルト「そうねえ……暗殺とか、牢屋の看守とか、そんなトコ。でも、もう組織を抜けようと思つてゐるの。」

「ナン・哀「え？ なんで！？」

コナンと哀は、驚きながら聞いた。

アーベルト「だつてアタシ、ながば強制的に暗殺をやらされてたし、それに……アタシのお姉ちゃんを……たつた1人の肉親を殺したのよ……アイツ……ジン……！」

コナン「じゃあ、なんでもつと早く逃げようとしたのか？」

アーベルト「逃げられないのよ……アタシの左腕に、コレがあるかぎり……」

そう言つと、雷薙は左腕のゾーテをまくつた。

「ナン・哀「！」

「コナン」「これ……！」

哀「呪いのタトウ……！」

アーベルト「コレは雷縛印といつて、ジンに付けられたの。組織に

反した行動をしようとするが、この雷縄印が反応して、まるで雷を

帶びた縄で縛られているような激痛が走るの・・・」

コナン「つまり、それを解くには、ジンを殺さないとダメって事か。

「

哀「そういう事ね・・・」

アーネット「でもアタシ、この命に変えてもあなた達を守るわ。」

コナン「君、どうしてここまで・・・？」

アーネット「アタシの腕の雷縄印は、元々アタシの一族に伝わる秘術の呪いだったのよ・・・。それを、ジンに頼まれたとはいえ不注意で教えてしまった・・・だからアタシは、命に変えてもジンを倒す！！」

哀「でもどうするの？」

アーネット「そうね・・・とりあえず、アタシが外にいる時にいろいろ考えるわ。もう監視時間も終わる頃だし。」

バーボン「アーネット、ジンが呼んでいる。出で。」

アーネット「わかったわ、待つて、バーボン。」

そう言つと、雷薙はコナンと哀にヒソヒソ声で話しかけた。

アーネット「実はアタシ、アイツとつき合つてゐるのよ。」

コナン・哀「え、そうなの？」

雷薙は顔が赤くなつた。

外に出た雷薙は、ジンの待つ部屋に向かつた。

アーネット「ジン、入るわよ・・・」

ジン「来たか、アーネット。」

アーネット「ジン、何の用？」

ジン「たまには、仕事以外の事もしようと思つてな。」

そう言つと、ジンは雷薙をベッドに押し倒した。

アーネット「あら、殺人ばかりで寂しくなつたの？」

ジン「そうだな・・・オマエは特別な女だからな・・・」

そう、雷薙がつき合つてゐる相手とは、ジンなのだ。

その彼を、彼女はあざむき、殺そうとしている・・・。

ジン「他のヤシの調子はどうだ?」

アーベラット「順調よ。ジン、一言あなたに言つておきたいんだナビ。

ジン「ん?なんだ?」

アーベラット「新一帯ヒシHリーを良く見ると、足下すべられるわよ。」

ジン「フッ・・・うだな。まあ、しつかり作戦は考えてあるわ。」

雷薙は黙っていた。

コナンと哀は、今はまだ牢屋に閉じ込められている。

しかし、彼らは信じている。蘭達が必ず助けに来てくれる事を・・。
そして、阿笠博士が地下にこもつてから、3時間が経過しようとしていた・・。

救出作戦・・・突入！新たなる仲間達

コナンと哀が黒の組織に誘拐されてから、約6時間が経過しようとされている。阿笠博士の家には、毛利蘭、毛利小五郎、妃英理、鈴木園子、京極真、服部平次、遠山和葉、黒羽快斗、中森青子、日暮十三、佐藤美和子、高木涉、宮本由美が集結していた。

阿笠は、地下室で開発した新型探偵アイテムをみんなに渡した。所持者と新アイテム説明は、以下の通り。

蘭ー強化版腕時計型麻酔銃・腕力強化バンド・強化版伸縮サスペンダー・キック力増強シユーズ・どこでもボール射出ベルト・強化版探偵バッジ

小五郎ー強化版腕時計型麻酔銃・腕力強化バンド・強化版伸縮サスペンダー・強化版トランプ銃・強化版探偵バッジ

英理ー強化版腕時計型麻酔銃・腕力強化バンド・強化版伸縮サスペンダー・強化版トランプ銃・強化版探偵バッジ

園子ー強化版腕時計型麻酔銃・腕力強化バンド・キック力増強シユーズ・強化版伸縮サスペンダー・どこでもボール射出ベルト・強化版探偵バッジ

真ー強化版腕時計型麻酔銃・腕力強化バンド・キック力増強シユーズ・強化版伸縮サスペンダー・どこでもボール射出ベルト・強化版探偵バッジ

平次ー強化版腕時計型麻酔銃・強化版伸縮サスペンダー・キック力増強シユーズ・どこでもボール射出ベルト・強化版伸縮サスペンダー・強化版探偵バッジ

和葉ー強化版腕時計型麻酔銃・腕力強化バンド・キック力増強シユーズ・どこでもボール射出ベルト・強化版伸縮サスペンダー・強化版探偵バッジ

快斗ー強化版腕時計型麻酔銃・強化版トランプ銃・強化版伸縮サスペンダー・キック力増強シユーズ・どこでもボール射出ベルト・強化版探偵バッジ

化版探偵バッジ

青子－強化版腕時計型麻酔銃・腕力強化バンド・キック力増強シユーズ・どこでもボール射出ベルト・強化版伸縮サスペンダー・強化版探偵バッジ

目暮－強化版腕時計型麻酔銃・腕力強化バンド・強化版伸縮サスペンダー・分離型竹刀・強化版トランプ銃・強化版探偵バッジ
佐藤－強化版腕時計型麻酔銃・腕力強化バンド・強化版伸縮サスペンダー・分離型竹刀・強化版トランプ銃・強化版探偵バッジ
高木－強化版腕時計型麻酔銃・腕力強化バンド・強化版伸縮サスペンダー・分離型竹刀・強化版トランプ銃・強化版探偵バッジ
由美－強化版腕時計型麻酔銃・腕力強化バンド・強化版伸縮サスペンダー・分離型竹刀・強化版トランプ銃・強化版探偵バッジ
強化版腕時計型麻酔銃－麻酔針の効力をアップし、30発も撃てるようになつた。補充も可能。

強化版伸縮サスペンダー－サスペンダーの耐久力が上がり、伸びる長さもアップした。

腕力強化バンド－腕力を強化できる強力なリストバンド。蘭や小五郎だけでなく、腕に自信のない人でも扱える万能品。

強化版トランプ銃－快斗が持つていたトランプ銃を改造し、パワーアップしたモノ。麻酔効果が含まれている。

分離型竹刀－鉄製の強力な竹刀。1本から2本の竹刀へと分離させ、操る事ができる。1本の時には、真ん中のボタンを押す事で盾にもなる。

強化版探偵バッジ－受信範囲が広がつた、探偵団バッジ。仲間との交信に使用。

博士から探偵アイテムを受け取つた蘭達は、突入の際のチーム決めをした。チームは以下の通り。

- Aチーム－蘭、平次、和葉、快斗、青子
- Bチーム－高木、佐藤、由美、園子、真
- Cチーム－目暮、小五郎、英理

そしていよいよコナンと哀救出のための作戦会議が始まった。

同じ頃阿笠は、ある場所に電話をかけていた・・・。

そう・・・アメリカに・・・そこには、あの人物達・・・！

！！

一方、こちらはコナンと哀が監禁されている聖学院高校である。

コナンと哀は両手に手錠をかけられ、牢屋に閉じ込められていた。

コナン「灰原、オマエ、あの5人の構成員の事なに知らないのか

？」

哀「知ってるわ。今から、説明するね・・・。シードルは暗殺専門の女性で、たまに誘拐などの任務を任せているの。幼い頃に組織に引き取られてから、地獄の訓練を受けてきた暗殺のエキスパートよ。アマレットは科学分野にも貢献していて、ジンにも一目置かれてる女性なの。出動の際は運転を担当しているけど、普通の戦いも得意だわ。ボルドーは本当は女だつたんだけど、恋人をFBIに殺された事によつて彼らを恨んでて、組織に引き取られた後は殺しの訓練を受けて女を捨てたの。別名はキメラよ。キュラソーは最年少の16だけど、殺しの腕は組織のなかでも5本の指に入る実力を持つてるの。作戦を立てるのが上手だけど、仲間にもあまり本心を明かさないわ。バー・ボンはウォッカの弟なんだけど、兄と違つて慎重派ね。愛用の銃トカレフを使いこなすわ。シードルとできているんだけど、ウォッカはこの事を知らないらしいわ。」

コナン「オマエ、よくそこまで覚えてるな・・・」

哀「毒薬の膨大なデータを覚えるよりは、こっちの方が数倍覚えやすいのよ。」

コナン「そりやそうだな・・・灰原・・・オレ達、助かるのかなあ・

・・

哀「何言つてるのよ！蘭さんは必ず私達を助けに来てくれるわ！信じましょ！！」

コナン「そうだね・・・」

？？？「フン、はたしてそつかしら？」

コナン「そうだね・・・」

？？？「フン、はたしてそつかしら？」

その声にコナンと哀はすぐ反応した。声の主は、ベルモットだった。

哀「ベルモット……！」

コナン「どういう意味だよ？」

ベルモット「言つた通りよ。そう簡単にあなた達を助け出せると思つ？」

哀「あなた、蘭さんの実力をなめてるでしょ？」

ベルモット「確かにあの子の力はスゴいわ。でもね、組織の構成員はチエスの駒でいうポーンクラスだけでも70人はいるのよ。それにルーククラスが50人、ビショップクラスが30人。そして、強力なナイトクラスが私も含めて13人。もう結果は見えてるわね。」

コナン・哀「ナイトクラス？」

ベルモット「そうよ。私、ウォツカ、シードル、バー・ボン、ボルドー、キュラソー、アマレット、アニゼット、コルン、キャントン、私も名前を知らないのが2人、そしてジンで13人。」

哀「それだけ？」

ベルモット「ハア？」

哀「蘭さんはきっと、毛利さんや日暮警部達を連れてくるわよ……。全国の警察が総動員してやつて来れば、200人は軽く越すわ。」

コナン「組織の構成員はオマエ達全員で163人。そしてボスが1人。200人以上と164じゃ、勝負は見えてるよ。」

ベルモット「うるさいわね、黙つてなさい……！」

ベルモットはコナンと哀の口にガムテープを貼り、口を塞いでしまつた。

「コナン・哀……ん……ん……ん……ん……！」

ベルモット「クールガイとシェリー、あなた達なにか勘違いしてるみたいだけど、私達ナイトクラスの実力は、下級兵とはワケが違うのよ……それにボスの力もケタ違い。そして側近としてもう1人……クイーンクラスのパンドラがいるのよ。」

「コナン・哀……んんんん！？（パンドラ……！？）」

ベルモット「そうよ、伝説のパンドラ。彼女は恐ろしい力の持ち主。」

警察なんて足下にも及ばないわ。」

そう言うと、ベルモットは2人のガムテープをはがし、牢屋から出て行つた。

5分後、雷薙がやつて來た。

アーネット「新一君、シーリー、匂いはんよ。」

哀「もうそんな時間？」

アーネット「あなた達、結構熟睡してたからね。ここに来てから、20時間はゆうに過ぎてるわよ。」

コナン「雷薙さん、少し聞きたい事があるんだけど。」

アーネット「何？新一君。」

コナン「あなたは、13人のナイトクラスの一人なの？」

アーネット「どうしてそれを・・・」

哀「ベルモットがさつきまでいて、話していったのよ。」

アーネット「そう・・・確かに、アタシはナイトの一人よ。でももう組織を裏切るつもりだし、ルーカとビショップの何人かも、力を貸してくれるつて言つてたわ。」

コナン「どうやつて説得したの？」

アーネット「クスッ、大人のみ・りょ・く・よー。」

哀「さすがね・・・」

コナンと哀は、驚いた。その時、雷薙の携帯電話が鳴つた。

アーネット「はい、もしもし・・・ああ、ジン・・・え？すぐに来て？？」

ジンと対等に話している雷薙を見て、コナンと哀はさらに驚いた。

アーネット「はいはい、今そつちに行くわよーおとなしく待つてなさい！」

コナン「雷薙さんつて、ジンと対等に話せるんだね・・・」

哀「私なんか、すごく怖いのに・・・」

アーネット「人間誰しも弱みがあるもの。弱みさえ握つちやえば楽勝よ。」

そう言うと、雷薙は牢屋から出て行つた。

アーベット「ジン、来たわよ・・・」

ジンは雷薙が入ってきたとたんに、彼女をベッドに押し倒した。

アーベット「ジン・・・質問してもいい?」

ジン「何だ?アーベット・・・

アーベット「もしアタシが組織を裏切って、あなたを殺そうとしているとしたら、どうする?」

ジン「フツ、オマエに殺されるなら、本望だ・・・」

アーベット「ホントにそう思つてる?」

ジン「オレが今までウソをついた事があつたか?」

アーベット「ないわ。」

ジン「だつたら、オマエもオレを信じる。オレは、オマエを信じてるんだぜ・・・?」

アーベット「ええ、信じるわ・・・」

ジンと雷薙は、熱いキスをした。

アーベット「ジン、もうそろそろ蘭つて子が来る時間なんでしょう?」

ジン「ああ、あの娘の事だ、仲間も連れてくるだろう。丁重にもてなしてやるわ。」

アーベット「163人も構成員いるんだから、これで負けちやつたら笑いモノよね・・・」

ジン「フフフ・・・それもそうだなあ・・・」

ジン・アーベット「アハハハハ!――」

ジンは楽しそうに笑つてゐる。雷薙は「ジンの笑顔が久しぶりに見れた」と微笑んでいた・・・。

それからしばらくたつて、聖学院高校の前には蘭達が集結していた。またチーム名を書くのはめんどうなので、作者の勝手な都合上省かせていただぐ。

日暮「我々の目的は、この廃校のどこかに囚われている新一君と志保君を救い出す事だ!――昨日決めたチーム」と、一丸となつて突破しろおー!――」

日暮のかけ声と共に、13人は校舎内に突入していった。途中、ポン兵、ルーク兵、ビショップ兵が数人出てきたが、蘭達は何の苦もなくなぎ払っていく。数分もしないうちに階段にたどり着いた。

日暮「蘭君達は2階、園子君達は3階、ワシらは4階に行くぞ！」

そう言って、蘭達は別れた。

日暮、小五郎、英理は4階に着いた。そこに待っていたのは・・・。

？？？「待つてたぜ、日暮十三、毛利小五郎、妃英理・・・」

小五郎「オマエは誰だ！？」

マンハッタン「オレの名はマンハッタン、黒の組織のナイトクラスの1人・・・」

同じ頃・・・3階に着いた園子、真、佐藤、高木、由美は、ボルドーと対峙していた。

ボルドー「へー、男2人に女が3人か・・・まあまあだね。オマエ達も私のコレクションにしてあげるよ。フフフ・・・」

園子「お、女・・・！？」

そして、蘭、平次、和葉、快斗、青子の前には、ウォッカがいた。ウォッカ「毛利蘭か・・・オレ一人相手に4人も連れてくるのは、

「いや、ちとやけいんじゃねえか？」

蘭「卑怯なのは、あなたの方よ！」

和葉「そうや！！2人も人質とりよつて！！」

平次「2人は今どこにあるん!?」

ウォツカ「アイツらは今、地下室だ・・・だが、見張りがいるぜ・・

•

快斗一 だつたら、今から5人で乗り込んで・・・

ウオッカ一
フン・・・ムダだな!!!!

そう言つた瞬間、ウオツカは5人に強烈な打撃を加えた。
蘭、和葉、

蘭 「ぐ・・・立てない・・・」

ウォッカ「5人で乗り込むだと? 笑わせる。オレ1人に手こづつて

るオマエらが、よくそんな言葉を言えるな?地下にはシンの兄貴た
けじやねえ、腕利きのスナイパーが数人控えてる。聞かせてくれ、
どうやつて2人を救い出すんだ?さあ、言つてみなー!!!!

蘭「く・・・うああああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああ

快斗「オレ達こよ・・・」

青子「仲間が・・・」「

平次 おる!!!!

壁に穴が空いている。平次がそう言った瞬間、後ろの方から爆発音が聞こえた。見ると、

ウォツカ「な、何だ今の爆発音は！？」

空いた穴の外には、小型飛行機が2台飛んでいた。ゆっくりと扉が開く。

？？？「見事ね。あなたの計算した地点に穴を空けたら、うまい

つたわ。
阿笠博士。」

阿笠「ウム、ありがとう、有希子君、優作君。このバズーカ砲を扱えるのは君達しかおらん。間に合つたぞ、蘭君。君のカバンに入つ

てる強力な発信機は、聖学院高校の場所を教えてくれた。さつき来た蘭君のメールは、ワシに情報を与えてくれた。蘭君が聖学院高校の中でワシに送り続けていたSOSは、仲間という光をここに連れてきた！！！」

小型飛行機の中から、阿笠博士と合流した工藤優作と工藤有希子が現れた。

阿笠「そして、仲間はもう4人。今回は、彼らも動いてくれたぞ・・・」

もう1台の飛行機には、FBIのジョディ・スターリング、赤井秀一、ジェイムズ・ブラック、そして本堂瑛祐が乗っていた。

ジョディ・スターリング「どうやら、間に合ったようね。」

赤井秀一「ああ、ヤツらの本拠地をついに突き止めた・・・」

ジェイムズ・ブラック「瑛祐君、悪かったね・・・休日なのに引っ張り出して・・・」

本堂瑛祐「いえ・・・ボクもアイツらに殺された父と姉の仇を討ちたいですし、アイツには聞きたい事もありますから・・・」

ジェイムズ「ではゆくぞ、ジョディ君、赤井君、瑛祐君！・・・相手にとつて不足はない！！！」

ジョディ・秀一・瑛祐「はい、ボス！！！」

最強の仲間が今・・・現る！！！

激突・・・黒の組織と命をかけた戦い

黒の組織に誘拐されたコナンと哀を救うため、蘭達13人は聖学院高校に乗り込んだ。しかし、待ちかまえていたウォッカ達に苦戦を強いられ、大ピンチに陥ってしまった。そこに、なんと優作やFBIが駆けつけた！！

現在、それぞれのいる場所は、以下の通り

4階 毛利小五郎、妃英理、日暮十三、マンハッタン

3階 鈴木園子、京極真、佐藤美和子、高木涉、宮本由美、ボルドー
2階 毛利蘭、服部平次、遠山和葉、黒羽快斗、中森青子、ウォッカ

1階 ポーン、ルーク、ビショップ兵数名

地下 モニタールーム ジン、アニゼット（風魔雷薙）

地下 待機室その1 バーボン、シードル

地下 待機室その2 キュラソー、アマレット、キャンティ、コルン、ベルモット、その他1名

地下 牢獄 江戸川コナン、灰原哀

地下 場所不明 あの方、パンドラ

聖学院高校上空 工藤優作、工藤有希子、阿笠博士、ジェイムズ・ブラック、ジョディ・スター・リング、赤井秀一、本堂瑛祐

蘭「どうやら、応援が来てくれたみたいね・・・」

ウォッカ「フン、そんなバカな事があるか！！上空から校舎に穴を空けるようなヤツが、どこにいるってんだ！？！」

瑛祐「ここにいますよ・・・」

ウォッカ「な、何！？！」

蘭「え、瑛祐くん！？！」

瑛祐「お久しぶりです、蘭さん・・・しかし今長話をしているヒマはありませんね・・・手早くケリをつけましょう・・・」

ウォッカ「ふ・・・ふざけるな・・・オマエのようなガキに、このオレ様がやられるかあ！？！」

ウォッカは叫ぶと同時に、瑛祐の方へ走ってきた。

蘭「瑛祐君、危ない！？！」

しかし、瑛祐は冷静を保っている。

瑛祐「運の悪い人だ・・・焦りさえしなければ、長生きできたのに・・・」

瑛祐は言つが早いが、一気にウォッカとの間合いを詰めると、ウォッカの腹に衝撃を加えた。

ドンッ！！！

ウォッカ「オマエ・・・今、何をした・・・？」

瑛祐「ハ不打はちふだです。一撃で相手を死に至らしめる8力所の急所。あなたもなかなか早かつたですが、今回は相手が悪かつたですね。」

ウォッカはそのまま倒れた。平次が近寄つて、ようすを確認する。

平次「し、死んでる・・・」

瑛祐「さあ行きましょう、皆さん・・・」

蘭「う、うん・・・」

蘭達はウォッカを残し、先に進んだ。そこに、ジンと雷薙が現れた。

ジン・アニゼット「ウォッカ・・・」

ジンと雷薙はウォッカの死を確認すると、なんと涙を流した。

ジン「オマエがいなくなるなんて寂しいよ・・・」

アニゼット「今まで、いろいろありがとう・・・」

そう、ウォッカはジンと雷薙が出会いきっかけを作ってくれた人物だったのだ。

ジン・アーネット「さよなら……」

ジンは、ウォッカを抱えた。

アーネット「さあ、ジン、行きましょう。ウォッカは地下で埋葬するわ。」

ジン「ありがとう、雷薙……」

アーネット「初めて本名で呼んでくれたわね……ジン……」

ジンと雷薙はキスを交わし、地下へと急いだ。

3階では、園子達とボルドーが戦っているところにジェイムズ、ジョディ、秀一が駆けつけた。

ボルドー「刑事つてのもたいした事ないんだね。ヒマつぶしにもならないよ。」

佐藤・高木・由美「くつ……」

ボルドー「鈴木財閥の令嬢なら、「ゴーストジュエル」の事は知ってるよな？」

園子「聞いた事がある…自らの体を犠牲にして願いを叶える事ができる禁断の宝石……！」ま、まさかあなた……」

ボルドー「その、持ち主さー！ダイヤショットー！」

ボルドーはそう言つと、腕からダイヤの弾丸を撃つてきた。

園子「速い！！！」

園子はあつという間に傷ついていく。

真「そ、園子さん！…」

園子は片膝をついた。

撃ち終わつたボルドーの腕は、人間の手ではなかつた。

佐藤「何なのあの腕……機械！？」

高木「人間じゃない……？」

ボルドー「そう、私は人間を捨てたんだ。あの日から……」

ボルドーは、自分の過去を話し始めた……ベトナム戦争の元アメリカ軍戦闘員だった彼氏と今までに結ばれようとしていた時、捜査

を担当していたFBIに彼氏が連れて行かれ、殺された事・・・そして自分も連れて行かれ、地獄の拷問を受けた事を・・・。

ボルドー「その数ヶ月後、私はなんとか彼らから逃げ出す事ができた。でも、近くの湖で顔を洗おうとした時に自分の顔を見て絶望したよ。私はもう、女ではなくなつていたんだ。」

ジョディ「FBIがそんな事を！？！」

秀一「本当ですかジェイムズさん！？！」

ジェイムズ「ああ、本当だ・・・一部の連中だろう・・・大量虐殺をしたアメリカ軍への憎しみから、魔女狩り的な事をしていたのは同期のヤツから聞いている。アイツも戦争の犠牲者だ。」

ボルドー「同情なんていらないんだよ。刑事ども！？！」

同じ頃、4階では小五郎、英理、日暮がマンハッタンと戦っていた。

マンハッタン「ブローニング、タイプ1。いくぞ！！」
マンハッタンはいきなり拳銃を撃つてきた。

小五郎「ハアッ！？」

小五郎は腕力強化バンドで弾丸をなぎ払う。

マンハッタン「なかなかやるな。小五郎！」

小五郎「テメエはこんな誰でも扱える銃使いやがつて・・・なめてんのか？」

小五郎の顔は、刑事時代の顔に戻っていた。

マンハッタン「じゃあこんなのはどうだい？タグ爆弾！？」

マンハッタンは爆弾を取り出すと、小五郎に向かって投げつけた。

小五郎「なつ・・・」

爆弾は小五郎をそれ、英理に当たった。

英理「キヤア！？」

小五郎「テメエ、最初から英理を狙つたな！？」

マンハッタン「オマエや日暮は簡単につぶせねえからな！そつちの女ならいくらでもやれる。」

マンハッタンは、なおも英理を狙う。

マンハッタン「ナパーム・デス！？！」

強力な爆弾が、またも英理を狙う。

小五郎「テメエ・・・いい加減にしろよ・・・！」

小五郎は、ナパーム・デスから英理をかばつた。

小五郎「英理、大丈夫か？」

英理「あなた・・・ありがと・・・」

マンハッタン「その体を傷つけて妻を守るか、偽善者！しかしナパーム・デスでその程度のダメージとは、さすが元刑事だな。小五郎！」

小五郎「オレが偽善者なら、テメエは卑怯者だぜマンハッタン！」
マンハッタン「オレはテメエの怒りをとことん上げてえのさ。オマエは昔から何も変わってねえ・・・オレが家畜や動物達を殺してた時もオレをとがめたな。」

その声に、小五郎は驚愕した。

小五郎「おい・・・待てよマンハッタン・・・オマエ・・・オマエまさか・・・！」

マンハッタン「最初は気づかなかつただろ？オレさ。子供の頃オマエ達とつるんでいた・・・」

小五郎「久遠寺・・・烈火・・・！？」

英理「私とあなたの・・・幼なじみ・・・」

マンハッタンの、知られざる過去とは・・・！？

3階に戻る・・・

ボルドー「だから私は彼の仇を討つために、この世を憎み嫌み、黒の組織に入った。みるかい？」

ボルドーはそう言つと、ソテから機械の腕を出した。

ボルドー「これがダイヤショット、これはルビー・バーナー。見なよ、この腕！コイツがゴーストジュエル！拷問によるボロボロの体にはよくなじんだよ。ジンに会つたのは遅くはなかつた。」

回想・・・

ジン「スバらしい才能を感じる。どうだ？本当に組織に入つて、豚共を殺していかないか？しょせん能力のない人間なぞ・・・ただの家畜なんだよ。このゴーストジュエルと機械化の手術は、オマエのような女にふさわしい。強くなれ！名前を捨てろ！オマエは・・・キメラだ！・・！」

ボルドー「死にものぐるいで、私は組織の訓練場でこの身を戦闘モードにしていった・・・何日も・・・何ヶ月も・・・何年も・・・そして・・・ナイトクラスになったのさ。」

園子「戦争は、憎しみしか生まないからね・・・でも私は負けるワケにはいかないんだ！・・・」

園子は次々と攻撃を繰り返していく。ボルドーは応戦するが、数分のうちに追い詰められた。

ボルドー「くつ・・・ここまでか・・・」

園子達が麻醉銃を撃つ前に、ボルドーは自分の腹を撃ち抜いた。ボルドーは倒れた。

園子「女としての幸せだけじゃなく・・・人間としての幸せも捨てちゃつたんだね・・・」

園子達は絶命したボルドーを残し、先に進んでいった。

そして、4階では・・・

マンハッタン「思い出させてやるよ・・・オレ達の過去を・・・」

回想・・・

「やーーい宿無し烈火！」

「死んじまえ！」

「町から出て行け！」

小五郎「やめろオマエら！！」

英理「何なら私達が相手になつてやるわよ・・・」

「やべえ、毛利と妃だ！！」

「アイツら、メチャクチャ強いぞ！！」

「逃げる！！」

小五郎「大丈夫か烈火？」

英理「アイツら、追い払つてあげたよ。」

烈火「助けなんていらなかつたのに。ボクが弱いからいけないのさ。毛利や妃みたいに強くなればいいんだ。」

数日後、烈火が犬を殺した時・・・

小五郎「なんて事するんだ烈火！！」

英理「かわいそうじやない！！！」

烈火「何怒つてんだよ毛利、妃。弱いモノを殺しただけだぜ？弱いヤツが強いヤツの犠牲になるのは必然なんだ。だからオレは強くなる。アイツら皆殺しだ。毛利と妃は許してやるよ。」

小五郎・英理「烈火・・・」

そして・・・6人の子供達が刃物によつて切り刻まれる事件が町に起つた。犯人は久遠寺烈火と断定。しかしうち町に烈火の姿はなかつた・・・。

小五郎「烈火・・・オマエ本当にあの時の烈火か！？」

マンハッタン「そうさ小五郎。モニタールームでオマエと英理を見

かけた時は、正直つれしかつたぜえ・・・しかしオレは黒の組織、

オマエ達は敵の方・・・運命が3人を分けた・・・

小五郎「それでもよ、オレに手加減するのはガラじやねえ。なおの事、オマエはオレが倒すしかねえな！！」

マンハッタン「できるかな？小五郎。」

マンハッタンは、雷の弾丸を放つてきた。小五郎はそれをなぎ払う。小五郎「へつ！..全部壊してやつたぜ烈火！」

マンハッタン「その名前で呼ぶんじゃねえ！！オレは黒の組織のマンハッタンだ！！！」

一方、コナンと哀が監禁されている牢屋では・・・

アーネット「いい知らせよ。蘭ちゃん達が中に来てるわ。」

コナン「ホント？」

アーネット「ええ、それでね・・・」

ジン「アーネット、悪い知らせだ・・・」

コナン・哀「ジン・・・」

アーネット「どうしたの？ジン。」

ジン「ボルドーがやられた。もはやわずかな余裕もない・・・あの作戦を実行に移す・・・」

アーネット「そう。じゃあアタシはちょっと別の用があるから・・・」

「そう言つと、雷薙は牢屋をあとにした。

ジン「ああ、オマエ達2人も来い。の方をお待ちだ・・・」

ジンは「ナンと哀を抱え、どこかに運んでいった。

マンハッタン「テメエらはあの時・・・オレを見下してたんだ！！さぞ優越感にひたつてただろうよ。オレ達は強い、オマエは弱いってな。オマエらは心の中でオレをバカにしてやがったんだ。」

小五郎「あのよう・・・オレはただ・・・オマエとダチになりたかつただけだぜ。烈火・・・」

マンハッタン「そんなデマカセ信じられるか・・・どのみち、オレ達

はもう互いに別の世界にいるんだよ！！」

小五郎「・・・そうだな。久しぶり。そんでさよならだ！！」

マンハッタン「オレの最強の爆弾、デスファットマンで死にくされ
！！！」

マンハッタンはデスファットマンを小五郎に投げる。しかし小五郎
は苦もなくかわした。

マンハッタン「なぜだ・・・なぜ当たらねえんだ！！！」

小五郎「わからないのか？烈火・・・」

小五郎は、マンハッタンとの間合いを詰めた。

マンハッタン「うつ・・・」

小五郎「オマエがオレ達との過去を話した事で、オレを傷つけにく
くなつちまつたんだよ・・・まだ良心が残つてたつて事だな。そん
なオマエに、殺人者はやっぱ似合わねえんだよ・・・さあ・・・お

別れだ烈火・・・」

小五郎は、マンハッタンをつかみ上げた。

マンハッタン「うわっ！！」

小五郎はマンハッタンを投げ飛ばし、腹に渾身の一撃をくらわせた。
ブンッ・・・！ドカ！！！

マンハッタン「うわあああああああああああああああああああ
あああああああああーっ！！！」

マンハッタンは吹っ飛び、窓を突き破つて落ちていった。転落して
いきながら、マンハッタンはこんな事を思つていた。

マンハッタン（小五郎よオ・・・やっぱテメエは強えなア・・・英
理さんがオマエを好きになつた理由が・・・今やつとわかつたぜ・・・
・あばよ・・・オレの一生の友達・・・）

マンハッタンは、体を地面に強打し即死した・・・小五郎は、涙を
流していた。

小五郎「烈火・・・オマエは、オレの一生の友達だぜ・・・あばよ、
親友・・・」

小五郎と英理は泣きながら、日暮と共にその場を立ち去つた。

同じ頃、雷薙は聖学院高校の屋上にいた・・・。

アーベルト「マンハッタンの生命反応が消えた・・・どうやら彼も負けたようね・・・ところで・・・こんな所にアタシを呼び出して何の用かしら？ベルモット・・・」

ベルモット「あら、とぼける気？ウォッカにボルドー、そしてマンハッタン・・・ナイトクラスの彼らが、あまりにもあっさりやられすぎてる・・・誰かが情報を漏らしているとしか思えないでしょ？」

アーベルト「・・・」

アーベルト「それで、アタシが怪しいとこらんだ、か・・・なかなかできた推理ね・・・でも、他にもアタシをつけ狙う理由があるんじゃない？例えばジンの事、とか・・・」

ベルモット「へー・・・わかってるじゃないの・・・ジンは誰にも渡さない！！彼は・・・私のモノよ！！！」

アーベルト「50もいった年増のばあさんが、何言つてんだか・・・」

「
ベルモット「フン！-ジンの事はどうでもいいわ・・・あなたとは、一度決着を付けたいと思っていたのよ！-！-あ・・・殺してやるわアーベルト！！！」

アーベルト「フフフ、そのセリフ・・・そのままあなたに返してあげるわ、ベルモット！！！」

女の戦い・・・勃発！！！

女のケジメ・・・雷薙ＶＳベルモット

黒の組織に誘拐されたコナンと哀を救うため、蘭は仲間と共に聖学院高校に乗り込んだ。待ちかまえていたのは強力な構成員達だったが、園子のチームはボルドーを討ち倒し、小五郎のチームはマンハッタンを討ち倒し、蘭のチームも本堂瑛祐の助けを借りてウォッカを討ち倒した。一方、牢屋に監禁されていたコナンと哀は、ジンによって連れ出されていた・・・。

聖学院高校屋上では、雷薙とベルモットが対峙していた。・・・

ヘルモット・あなたはこの私が倒す！！

苦もなくかわす。

ベルモット「なんで・・・？私の方が力があるのに・・・」
アーネスト「力ってのは・・・」ういうのを言つのよ！――

の手の動きは・・・速い。

アーヴィング「風魔物語」・翻案版

ものスゴイ雷の衝撃に、ベルモットは吹っ飛ばされ

アーヴィング、「元祖」の「元祖」ではない。

ベルモットは雷薙にボコボコにされていく。

ベルモット「うう・・・なんてパワーなの・・・」

雷薙のステッキから放たれたロープが、ベルト

と巻き付いた。

雷薙はベルモットを振り回し、投げ飛ばした。

その頃、ジンに連れ出されたコナンと哀は、地下のモニタールームにいた。2人共イスに座られ、繩でグルグル巻きに縛り付けられている。

「ナン、あのヘルモットか……」
哀「雷薙さんに押されてる……」

・ベルモットの力では勝てんだろう・・・雷薙に殺されるのがオチ

「ナン、それはいいけど、ジン、なんでオレ達をここに連れてきたんだ？」

哀れそうよ、人質なら牢屋に閉じ込めておけばいいでしょ?」「ジン」「確かに、ただの人質なら牢屋に閉じ込めておけばいい。」

たかな 細繩か調べた結果 オマエ達2人にはある新薬の実験台にふさわしいヤツだつたのさ・・・大切に扱わないと・・・」

ジン「新一、パンドラって知ってるか?」

「ナン、それで、ヘルモットが言っていたケイーンズの事?」ジン「それは『一ダネームの一つだ。パンドラ』については、世界中

な宝石・・・別名「命の石」の事だ・・・」

ジン「そうか・・・キッドが探ししているのか・・・新一・・・少し

「……………」

「ナン、な、なんで……？」
ジン「やせつそーか。やけに身のこなしが軽いと思つたり……」

哀「ジン、怪盗キッドの事知ってるの？」

ジン「知ってるも何も、初代キッドの盗一を殺したのは、オレ達の兄弟組織だ・・・」

ジンの言葉に、「コナンと哀は驚愕した。

コナン「そうだったんだ・・・だからキッドは組織を追っていたのか・・・」

哀「それよりジン、私達が新薬の実験台にふさわしいってどういう事？」

ジン「フフフ・・・それは、不老不死の薬・・・画期的な毒薬、「パンドラ」だ！！！」

コナン・哀「ふ、不老不死の薬！？」

ジン「新一、シェリー、オマエ達が飲んだAPT-X4869は、もともと細胞を自己破壊する薬だった事は知っているな？そのプログラムの偶発的な作用で、神経組織をのぞいた骨格、筋肉、内臓、体毛、それら全ての細胞が幼児期の頃まで後退化する神秘的な毒薬・・・だがな、あの薬はまだ試作段階・・・完成品はすでにできているんだよ・・・」

哀「そんな！APT-X4869は、私がいなければできないはず・・・」

ジン「アマレットと雷薙が共同で開発して、1ヶ月前ついに完成了のさ、パンドラがな・・・」

コナン「それで、オレ達を薬の実験台に・・・」

ジン「新一、オマエは最初にあつた時からただのガキじゃなって思つてたんだ・・・あの時、毒薬を飲ませて殺したにもかかわらず、妙な違和感は抜けなかつた・・・もしかしたらまだどこかで生きてるんじゃないかな・・・オマエの存在に気づいたのは、杯戸シリホテルの一件・・・ピスコを射殺した時だ。あの時、オレに刺さつた麻酔針・・・銃で撃ち抜いた後、組織に針を持ち帰つていたのさ・・・そして、ベルモットがしくじつたあの日、ベルモットに麻酔針を持ち帰らせて調べたら、あの時の針と成分が一致したんだ

・・・

「コナン、確信を持ったのは、あの暗殺未遂事件の時・・・かな？」
ジン「ほう、わかつてゐるじゃないか・・・さすがだな・・・あの時、
急にサッカーボールが飛んできたからな・・・おそらく、足に履い
ているそのシューズに何かカラクリがあるんだろう？」

ジンはコナンの足元を指した。コナンはバレた、とうつむいた。
ジン「さて、新薬の実験の事だが、オレ達がパンドラをオマエ達に
投与して、何をするつもりなのかわかるか？」

「コナン・哀、永遠の・・・人質・・・」

ジン「そうだ。オマエ達がパンドラの作用で不老不死になれば、死
ぬ事はない。ずっとオレ達の人質になる事になる・・・まあ、おし
やべりは終わりだ。オマエ達はここでおとなしくしていてもらおう。

「ジンはそう言つと、コナンと哀の口に布を巻き、口を塞いだ。

「コナン・哀、ん〜〜〜〜〜、ん〜〜〜〜〜・・・」

ジンはコナンと哀をそこに残し、モニタールームにカギをかけて出
て行つた。

屋上では、雷薙とベルモットの戦いが続いていた。

「アーヴィット、ハアア！タアア！アアアアアア！！」

雷薙のたび重なる攻撃によつて、ベルモットはボロボロになつてい
た。

「ベルモット、ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

「アーヴィット、魔性の女クリス・ヴィンヤードも、ここまでのように
楽に死なせてあげるわ。あ、そつか。クリスじゃなくてシャロンだ
つたわね・・・」

「ベルモット、くつ・・・」

「アーヴィット、さよなら、ベルモット。」

その瞬間、聖学院高校屋上に閃光が走つた。

駆けつけたジンの眼前にあつたのは、力を出し切つて疲れ果てた雷

アリの量を落とす事に成功した。この事から、

シン、雷薙、オマエ……ベルモットを殺したのか……？」

アーティジンのためよ……あの女が生きていいたら、あれは二つ。アーティジンはうなづいていた。

ジン「雷薙・・・・愛してゐぜ・・・・」

シンは靈籠を抱きしめた

アーティスト「ジ・ジョン」の「Hitch」

[! : !]

「アーティストの才能を発揮する。」

アーダシト「ジン~~~~~?」

シン・な
な
何た
雷痴

アーバンナ・エマタシ」(同)等が、現地の伝統文化に

シングルが見た先ははてては絶命しているヘルモットの死體があるた

（）わ、わかりました、す、すいませんでした、ゆ、許

レキ機

赤い糸

ジン「あ、ああ、そうだな……」怖い……」

雷痴のあくを透かすがたれ、シシに思ひがけ雷痴をすし落生せしす

と・・・。そう考えた瞬間、ジンはふるえていた・・・。

この分だと、シンと雷薙が結婚できたとしても、シンは雷薙のシリ

に敷かれそつである・・・。

一方こちらは、聖学院高校3階である。ボルドーを倒した園子、真、佐藤、高木、由美、秀一、ジョディ、ジェイムズの前には、組織のスナイパー、キャンティとコルンが現れた。

キャンティ「キヤキヤキヤ・・・暗殺事件の時にアタイ達を邪魔してくれた、FBIの赤井秀一じゃないのさ！――仲間もいるみたいだし、今日は楽しめそうだねえ！」

ジョディ「キャンティとコルン・・・志保ちゃんが言っていた、組織のスナイパーね・・・」

コルン「オマエ達・・・オレ達が今、ここで殺す・・・オマエ達、ここから先には行かせない。」

ジェイムズ「ならば・・・力ずくで通させてもりあつ――いくぞ、みんな！」

園子・真・高木・佐藤・由美・ジョディ・秀一「はい、ボス！！！」

キャンティ「キヤキヤキヤ！望むところや――行くよコルン――！」

コルン「返り討ちに・・・してやる・・・」

そしてこちらは、4階である。マンハッタンを倒した小五郎、英理、日暮、そして彼らに合流した優作、有希子、阿笠の前には、アマレットとキュラソーが現れた。

キュラソー「まさか、あのマンハッタンを倒しちゃうなんてね・・・

ビックリだよ・・・」

アマレット「でも、アタシ達はそうはいかないよ。ウフフ……」
目暮「女性と戦うのは好きじゃないが……私達も負けられんからな……」

小五郎「いぐぞお、英理……」

優作「有希子、覚悟はいいな？」

有希子「ええ、わかつてゐるわ！」

英理「任せて、あなた……！」

キュラソー「フン……！」

アマレット「あとで後悔しないでよ？」

さらにここからは、2階である。ウオッ力を倒した蘭、平次、和葉、快斗、青子、瑛祐の前には、新たな構成員、ギムレットが現れていった。

ギムレット「久しぶりね、瑛祐君……まさかこんな形で再会するとは……さすが、アタシの中学時代のライバルね。おもしろい、アタシも本気を出させてもらひわ。」

瑛祐「その声……田向琴美か……まさか、黒の組織に入つていたとはね。久しぶりに会つてなんだけど……君のその姿、昔のボクを見ているみたいでイライラするね。」

ギムレット「フン……相変わらず生意気な子だわ……だけど、前とは違うところがあるわね、瑛祐君。やけに体がボロボロになつてゐるじゃないの……」

琴美の指摘通り、瑛祐の体はキズだらけだつた。だが、瑛祐はウオッカ戦では一瞬でウオッ力を倒したため、彼の攻撃など受けていなければずだが……。

瑛祐「FBIと合流する前に、「強いヤツ」と戦つてね……」

琴美と瑛祐は、正面からぶつかり合った。
ギムレット「中学時代、アタシは杯戸中学校で無敵の女だった・・・
ところが、そこにあるあなたが転校してきた・・・」

「今日は転校生を紹介する。さ、自己紹介を。」

瑛祐・本堂・瑛祐だ。

田向琴美「ハン……生意気な顔だわ……」
英古「な……」
口う。

卷之三

琴美「ぐ・・・うう・・・」

瑛祐「フン・・・」れにこりたら、2度とオレにケンカを売るなよ。

L

ギムレット「初めてだつたよ・・・大人以外に初めて負けた・・・
それまでアタシを倒せる子供は、王族などの位の高い子で、特別な
教育を受けた子供や・・・噂に聞いた最年少FBIの2人の神童、
ロズゴート・バリーとワインセント・キース。この子達のように、
大人でも手に負えない、数名だけだと思っていた・・・その自信や

「誇りを、あなたは一瞬にして碎いたのよーっ！！！その時からアタシには目標ができた。強くなる他に、あなたを倒すという目標がねー！あなたにあの時負けたのは、あなたが、「私にはない何か」を持つてたからよー！あなたに勝てば、その「何か」が手に入るー！敗北という汚点も消えるー！その「何か」が手に入らずとも、あなたに勝てば、アタシとあなた、どちらが本物の「強さ」を持つてるかわかる！！！その決着を、今やつとつける事ができるー！よくぞこの時まで無事でいてくれた、本堂瑛祐よー！！！あなたを倒す事で、やつと前に進めるー！あなたを倒さねば、アタシの次の一步は踏み出せぬと思っていたのよー！！！」

しかし、瑛祐は冷静を保つていろ

瑛祐「…………ぐだらない…………」

瑛祐はそう言つと、琴美的足を引っかけた。

キムレッジ何!?

瑛祐「琴美よ、ここまで1人の敵にこたねてんだ!?」

瑛祐は、琴美を押し倒した。

まだ弱いからだ。

ギムレット「何!? なんですかって……アンタ! ! ?」

瑛祐「それに君は、昔のボクにこだわってるようだけど、昔のボクと戦つても何も手に入らないよ？あの時のボクは、ただのチンピラだつたからね・・・「何か」が手に入る、「何か」が変わるきっかけをくれるのは、「コブシ」に力がある子じゃない・・・「ココロ」に力がある子なんだ・・・いくぞ！――琴美――！」

ギターリットル...ヘル...・・・

瑛祐はそう言うと、琴美に攻撃を仕掛けていく。

瑛祐「才才才才才才才才！」

瑛祐「だあああああ！！」

「がつ！－！」

卷之三

ノベラチルド

ギムレット「へり・・・・なかなかせるわね・・・・でも忘れたの?アタシには水を操る能力がある事を・・・・」

そう言つと、琴美は水筒の水を口に含み、

「アーニッシュ」「ザーヴィー」「金剛」「受ササガ」「アーヴィング」「アーヴィング」

瑛祐がハネ逃した水のムチは
全て琴美は当たった

蘭「す・・・スゴイ・・・・・」

ギムレット「へい・・・・」うなつたら、あの子達から先にしとめて・

•
•
L

瑛祐「ボクに勝てないと踏んで、蘭さん達から先に狙うか？連発攻撃をくらい、自分の攻撃全て返されて、冷静さを失ったか？」

リバーフロント / リバーフロント

瑛祐「言つたでしょ？君が弱いだけだと・・・一点・・・集中！！

!

琴美は、瑛祐の一点集中を受け、床に倒れ込んだ。

漢古「物がれの物の心」の神龜。の人のう。

「ヨーク、君がさう言つてからこの状況がどうなるかの予想が、今、頭の中でぐるぐる回るんだ。」

ギレット・まさか……あの……大人の日本語でもかなねない子達のうち……1人を!? アタシも……手が出せなかつた子を……!?

瑛祐「なぜ手が出せなかつた！？力の差が歴然で、負けるとわかつてたからだろ？それは君の強くなる意志がうすく、覚悟もできてなかつたからだ。自分より一回りも一回りも強いヤツと戦い、得るモノは大きいぞ・・・たとえ血みどろになり、死にかけようとな・・・ソイツの持つ力、戦い方、心の持ち方、全てが身にしみて手に入る。吸収すればするほど、高いところが見えてくる。昔敗れた1人にこだわるなど、小さな事だ・・・ボクはもつと高いところへいく。帝丹高校での出会いをきっかけに、どんどん自分を高めていく。ただそれだけだ・・・」

器の違いが、強さの違い・・・！！！

決戦！！黒の組織・・・悲しい犠牲

黒の組織に捕まつたコナンと哀を助け出すため、蘭は仲間と共に聖学院高校に乗り込んだ。途中でFBIの3人と、本堂瑛祐、阿笠、優作と有希子が助けに現れ、戦いは蘭達が優勢になつた。

今それぞれのチームの状態は、以下の通り。

蘭側の状態 毛利蘭、毛利小五郎、妃英理、服部平次、遠山和葉、黒羽快斗、中森青子、阿笠博士、工藤優作、工藤有希子、ジエイムズ・ブラック、ジョディ・スターリング、赤井秀一、本堂瑛祐

黒の組織側の状態 ジン（不明）、ウォッカ（死亡）、ベルモット（死亡）、マンハッタン（死亡）、ボルドー（死亡）、ギムレット（敗北）、アマレット（戦闘中）、アニゼット（不明）、シードル（不明）、バーボン（不明）、キュラソー（戦闘中）、キャントン（戦闘中）、コルン（戦闘中）、江戸川コナン&灰原哀（監禁）、あの方&パンドラ（不明）、ローン&ルーク&ビショップ兵（ほどんど敗北、うち数名は裏切つて、雷薙についている）

2階には、蘭、平次、和葉、快斗、青子、瑛祐、ギムレットがいた。ギムレットこと日向琴美は、瑛祐に倒され、縄で縛り上げられていた。

瑛祐「蘭さん達は、先に行つてください！ボクも、後から追いつきますからー！」

蘭「う、うん、わかつたわ。」

蘭、平次、和葉、快斗、青子は、瑛祐とギムレットをその場に残して先を急いだ。

瑛祐「琴美・・・」

琴美「フン、瑛祐君、何やつてるの? アタシは負けたのよ? 早く殺しなさいよ・・・」

瑛祐「悪いけど、人殺しは趣味じゃないんだよ。それにオマエとは同級生だろう?」

瑛祐は琴美と2人きりになつたので、昔のようにオマエと言つている。

琴美「同級生、か・・・瑛祐君・・・アタシとんでもない過ちを犯してしまつたみたいね・・・アタシ、最悪だわ・・・このまま死んだ方がマシよ・・・」

次の瞬間、琴美の頬に平手が飛んだ。

琴美「え、瑛祐く・・・?」

瑛祐「バカやろう! 何でそんな簡単に、命を捨てようとするんだよ! ? 姉さんもオマエも! ! 命つてのはとても大事なモンなんだ! ! なくしてはいけない、大切なモンなんだぞ・・・! ! !」

瑛祐は涙を流している。

瑛祐「それに、オマエには死んでほしくない・・・幸せになつてもらいたいんだよ・・・オレのこの気持ち、オマエはわからんねえのかよ・・・! ! !」

琴美「え、瑛祐君・・・アタシの気持ち、気づいてるの・・・?」

瑛祐「え? おい、琴美・・・オマエまさか、オレの事を・・・?」

琴美「あ・・・そ、そうよ・・・アタシは、あなたの事が・・・好きだったのよ・・・」

琴美のいきなりの告白に、瑛祐は頬を染めて答えた。

瑛祐「なんだ、それなら早く言えばよかつたのに・・・」

琴美「じゃ、じゃあ瑛祐君・・・」

瑛祐「オレもオマエの事が好きだ・・・何年先になるかわからないけど、もしよかつたら・・・オレと結婚してくれないか?」

琴美「は、はい・・・・！喜んで・・・・！」

瑛祐は琴美の縄をほどき、2人は抱き合ってキスをした。今ここに、新たなカップルが誕生した・・・。

さて、ここは3階。キャンティ、コルンと対決している園子組は、少しずつではあるが、彼らを追い詰めていた。

キャンティ「ハア・・・ハア・・・・」

ジョディ「終わりよ！！」

ジョディの拳銃が、キャンティの腹を貫いた。

キャンティ「かはつ・・・」

ドサアツ・・・。

キャンティは絶命した。

コルン「キャンティ！－くそう、よくもキャンティを・・・これだけは使いたくなかったが・・・しかたがない・・・」

そう言うと、コルンはメガネを外した。

ジョディ「な・・・」

秀一「義眼！？」

コルン「コイツは、サイコスコープ・キヤノン。超能力を備えた、オレの最後にして最強の武器！－くらえ、キャンティの仇！－！」

コルンは目のサイコスコープ・キヤノンからミサイルを次々に発射してきた。

園子「わ、わ、わ！－！」

コルン「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ－！死ね、死ね、死ねえ！－！」

コルンはミサイルを乱射している。もう、完全に彼は狂っていた。

ドゴオ！－！

秀一の放った弾丸は、コルンの腹を一撃で貫き、コルンは絶命した。

秀一「コルン・・・恐ろしい男だつた・・・」

ジョディ「キャンティのために最後まで戦うなんて・・・キャンティ

イとゴルン、恋人同士だったのかもね・・・

園子達は、絶命した2人を残しその場を後にした。

そして、ここは4階。アマレット、キュラソーと田暮組との戦いは、すでに終結していた。

アマレット、キュラソーは、完全に絶命している。彼女達は自分達の有り余るパワーを抑えきれず、爆発によつて自滅したのだった。田暮達は、先に進んでいった。

一方、2階を進んでいた蘭達は、アーベットこと雷薙に会つてわしていた。

雷薙「あらら、こんなところで会つちゃうなんてね・・・」

蘭「あなたも、黒の組織の構成員・・・？」

雷薙「そうよ。アタシはアーベット。黒の組織のナイトクラスの1人・・・」

蘭、平次、和葉、快斗、青子は身構えた。

雷薙「心配しなくていいわよ。アタシはあなた達の味方だから・・・」

平次「味方やと・・・？」

雷薙「そうよ。アタシは今、2人を助けるためにルーク兵とビショップ兵を数人味方につけたところなの・・・さあみんな、出てきて！」

雷薙が指をパチンと鳴らすと、ルーク兵とビショップ兵数人が出てきた。

雷薙「この子達はアタシの味方よ。まあ、蘭さんはアタシと一緒に来て。」

平次「オレらは？」

雷薙「あなた達は、この子達と一緒に歩いて。あの方とパンドラは、別の所にいるから。」

和葉「アタシらは、その2人を倒せばええんやな？」

雷薙「そうよ。あの方とパンドラを倒さないかぎり、黒の組織は壊滅しないわ！」

快斗「わかった、行くぞ青子、和葉ちゃん、服部！..」

快斗、平次、青子、和葉は、ルーク兵とビシヨップ兵数人と共に走つていった。

蘭「さあ、私達も行きましょう。アニメ芝田さん、案内して！」

雷薙「こっちは、蘭さん！..」

蘭と雷薙は、地下室の一番奥の部屋に着いた。

ジン「待つてたぜ、毛利蘭・・・1人で来たようだな・・・」

蘭「あなたがジンね・・・コナン君と哀ちゃん・・・イヤ・・・新一と志保ちゃんはどこにいるの？」

ジン「フフフ・・・ここにいる・・・」

ジンは奥の扉を開けた。そこには縛られたコナンと哀がいた。2人ともグッタリしている。

蘭「新一・・・志保ちゃん・・・」

コナン・哀「ん〜〜〜〜〜〜、ん〜〜〜〜〜〜・・・」

蘭「待つてて！..今助けるわ！..」

ジン「おつと、そつはいかないな・・・」

ジンは蘭に拳銃を突きつけた。

蘭「ジン・・・いつたい何のつもり?」

ジン「コイツらは新薬「パンドラ」の実験台だ・・・今渡すわけにはいかない・・・」

ジンはそう言つと、蘭に向かつて発砲してきた。蘭は、それを軽々とかわす。

蘭「ジン・・・契約違反でしょ? 昨日の電話では、「今日の午後4時までにここに来い」としか言ってなかつたはずよ。」

ジン「フン・・・それはそれだ。」

蘭「卑怯者・・・」

ジン「フフフ・・・」

蘭「ジン、新一と志保ちゃんは返してもらひわよ。」

ジン「フン・・・オマエにオレが倒せるかな?」

ジンと蘭は、正面からぶつかりあつた。

蘭「ジン、さつき言つてた新薬の実験台つて、どういう事?」

ジン「フフフ・・・まあいい。教えてやるつ・・・我々組織が開発した新薬「パンドラ」はな、これまで誰もなしえなかつた夢、「不老不死」の願いを叶える事ができる奇跡の薬なんだ・・・そして、その実験台にこの2人が選ばれたという事だ・・・」

ジンの言葉に、蘭は驚愕している。

蘭「不老不死つて事は・・・まさか、あなた達が2人を誘拐した目的は・・・殺すためなんかじやなく・・・」

雷薙「「永遠の人質」ね・・・」

雷薙が言葉を発した。

雷薙「新一君と志保ちゃんがパンドラの作用によつて不老不死になれば、黒の組織は永久に2人を人質にしておける・・・しかも子供のままだから、どんな悪事も自由自在になる・・・悪魔のような、極秘プロジェクトね・・・。ジン・・・あなたがアタシの腕に雷縄印の呪いをかけたのは、「アタシを逃がさないため」が第一の理由

よね・・・？でも・・・それよりももっと具体的な理由があつたんじゃないの？たとえば・・・」

ジン「オマエにパンドラを飲ませ、不老不死の体にするためにオマエに雷縄印をつけた・・・」という事か？その通りだよ、雷縄・・・」

雷縄「そ、そんな・・・！」

雷縄は泣き崩れた。

雷縄「でも・・・そんなジンでも、アタシは好き・・・」

蘭「ジン・・・あなたのそのねじ曲がった根性・・・この私がたたき直してあげるわ！－」

蘭はジンに向かっていった。ジンは愛用のベレッタを乱射するが、蘭には当たらない。蘭は少しづつではあるが、確実にジンに打撃を加えていく。

ジン「ぐ・・・あ・・・」

ジンは、少しづつ蘭に追い詰められていた。

蘭「ジン、トロピカルランドの「ジェットコースター殺人事件」で、あなたとウォッカに会つたその日から、私達の運命は決まっていたのかもね・・・？」いやつて、ここで戦うという運命が・・・」

ジン「フフフ・・・そうだな・・・まさかあの時新一にすがりついて泣きじやくつていた女が、オレをここまで追い詰めるとは思わなかつたよ・・・」

蘭「ジン・・・志保ちゃんの行方を執拗に追つていたのは、彼女の事が好きだったからでしょ？でもね、しょせん黒と黒が混ざつても、黒にしかならないのよ？私と新一・・・白と白が混ざつても、白にしかならないようにな。同じ色の者同士は、結ばれない運命なのよ・・・」

ジン「フ・・・しかし雷縄は、もともと白だった女だ・・・違う色の者同士は・・・必ずいつか結ばれるのを・・・」

蘭「そうね。もともと敵同士だった新一と志保ちゃんが、今こうして両想いの恋人同士になつているように・・・」

蘭はコナンと哀の方を振り向き、笑顔を見せる。コナンと哀は顔を見合わせ、赤面した。

蘭「ジン・・・もしあの時、トロピカルランドで新一がAPT-X4869を飲まされて、小さくなつていなくても・・・同じ結果になつていたと思うわよ？」

ジン「な・・・なぜ・・・そう・・・思うんだ・・・？」

蘭の言葉に、さすがのジンも驚愕している。コナンも哀も、そして雷薙も驚いていた。

ジン「なぜそんな事が言える・・・？なぜそんな事がわかる・・・！？なぜそんな事が推理できる・・・？根拠があるんだろ・・・？答える・・・答えるんだ！！毛利蘭！！！」

ジンは言葉を荒げ、汗をかいている。今そこに、今まで数々の人を殺してきた冷酷な彼の顔はなかつた。やはり彼も、普通の人間だつたのだ。

蘭「なぜつて・・・わかつた、答えてあげるわ、ジン。1つ目の根拠は、「不可能なモノを除外していつて残つたモノが、たとえどんなに信じられなくとも、それが真相」だから・・・そして・・・もう1つの根拠は・・・」

次の瞬間、コナンが、イヤ・・・工藤新一がいつも口にしているセリフを蘭は発した。

蘭「真実は・・・いつも・・・たつた1つしかないからよ・・・この世に解けない謎なんて・・・チリ1つだってありはしないのよ・・・ジン・・・」

ジン「フン・・・そういう事か・・・やはりオレ達は相容れない関係のようだな・・・」

蘭「お互い様ね・・・」

ジン「毛利・・・蘭・・・」

蘭「ジ・・・ン・・・」

ジン「これで・・・終わりだ――――――――――――――――――――

蘭「これで・・・終わりよ――――――――――」

ジンと蘭は、衝突した。

次の瞬間、聖学院高校に閃光が走った。

数分後、ドアが開いて平次達が入り込んできた。

平次「工藤！！」

和葉「蘭ちゃん！！」

快斗「志保ちゃん！！」

青子「新一君！！」

小五郎・英理・園子「蘭！！」

真・瑛祐・琴美「蘭さん！！」

阿笠・目暮「蘭君！！」

高木・佐藤・由美「新一君！！志保ちゃん！！」

有希子・ジョディ「大丈夫！？」

優作・秀一・ジェイムズ「終わったのか・・・？」

平次達が駆けつけた時、勝負はすでについていた。蘭もジンも大量の出血をしている。

蘭「ジン・・・あなた、やるじゃない・・・急所を確実に狙つて、

弾丸を放てるなんて・・・」

蘭もジンも、血がかなり流れ落ちている

ジン「ぐ・ぐ・ぐ・やはりオマエは強かつたなあ・・・オレはもう体が
もたん・・・オマエの勝ちだ・・・あばよ・・・工藤新一、毛利蘭、
シェリー・・・雷薙・・・愛してた・・・よ・・・」

り、縄と布を解いた。

「新一、志保ちゃん！大丈夫？」

哀「蘭さん、ありがとう・・・」

蘭
新
・・・シンはどうなつたの・・・?
コノは黄ニツツニハラジノモ昆ニ。ジノは

「ナン「死んだよ・・・急所のハ不打に完全に入つてね・・・」

ガホッ！！！

コナン「蘭、大丈夫か？すぐに病院に運ぶから・・・」

蘭「ダメよ・・・もう私は助からないわ・・・どのみち私はこうな

哀「そんな・・・そんな・・・」

雷薙「こんなの・・・こんな別れ方、悲しきぎみよ・・・」

蘭一新一：・・・私、天国です」と新一達を見守りでいるから・・・志保ちゃんを必ず幸せにしてあげてね・・・おまけに・・・新一

パタツ
・
・
・
。

「ナン 「おー、蘭！ ！田を覚ませよ、蘭！ ！ ひ・・・」
蘭はそのまま絶命した・・・。

「ナン 「くわお・・・ちくしょお～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～つ！ ！ ！」

「ナンの黒の組織との戦いは、今終止符を打つた・・・。

決戦！－黒の組織・・・悲しい犠牲（後書き）

「どうも、ちば、ゴーリと申します。」こんな小説をここまで読んでくださって、ありがとうございます。

実は、Hピソードに後書きを書くつもりだったのですが、焦つて投稿したせいで忘れていました（おひおい・・・）そういうわけで、このHピソードから、過去のHピソードのネタバレと会話文をのせよつと思います。では最初なので、Hピソード1・2・3のネタバレと会話文を・・・

Hピソード1は、タイトルの通り「ナンと哀がさらわれる話でした。では」「」で、オリキャラの名前の由来を書こうと思います。

まず、物語に深く関わっている女の子、風魔雷羅ですが、この「風魔」という名前は、戦国時代にいた忍者、風魔小太郎がモデルになっています。いちおう辞書でも見つかりますが、さほど有名人ではないらしく、のつている辞書が少なめです・・・興味がある方は探してみてください。

次に、構成員の名前ですが、全部本当にあるお酒です。では、そのお酒を紹介しましょう。

アーベットは、アーヌの香りをつけたりキューールの一つです。

キュラソーは、蒸留酒にオレンジの皮やその他の香料成分を配合した甘いリキューールです。

アマレットは、アーモンド風味のリキューールです。

シードルは、原作に出ていたカルバドスと同じく、リンゴのお酒です。

ボルドーは、フランスのボルドー産のワインです。

バー・ボンは、トウモロコシ・ライ麦を主原料とするウイスキーです。

コナン「なんか、酒の工場みたいだな。」

哀「いいじゃない？お酒の勉強にもなるし・・・」

「ナン」「やつだな・・・」

エピソード2では、新たにマンハッタンという男が現れました。ちなみにマンハッタンとは、ベルモットとウイスキーなどを混ぜて作るカクテルの名前です。

コナン「増えたな・・・」

哀「ええ、そうね・・・」

コナン「次も出るらしいぜ。」

エピソード3では、本堂瑛祐がマジ強だったのに驚いた方もいたでしょう。これは私の設定です。

また、園子の宝石の知識は、やはり財閥の令嬢だからって事で・・・小五郎、英理と幼なじみだったマンハッタン。悲しい戦いになりましたね。

コナン「今回は悲しい戦いになつたな。」

哀「そうね。」

コナン「次回は女の戦いが勃発するらしいぜ。」

哀「工藤君・・・私、怖いわ・・・」

まあ、こんな感じです。エピソード6では4・5を紹介するので、お楽しみに〜・・・

初恋の人・・・そして未来へ

黒の組織との戦いは終わった・・・ナイトクラスの構成員は雷薙、琴美、シードル、バー・ボンをのぞいて全員が絶命し、下級兵は一斉検挙され、あの方とパンドラは逮捕される前に自決、ジンも蘭と相討ちになつて絶命した・・・。オレや哀を始め、多くの人が蘭の死を悲しんだ。特に瑛祐は蘭に惚れていたらしく、告別式で大泣きしていたが、その後琴美と結婚したらしい。赤井さんは、蘭の顔に明美さんの顔を重ね合わせていたらしく「やはりムチャはするモンじゃないな」と涙を流していた。園子は大親友を亡くした事で号泣したが、京極さんになぐさめられ1ヶ月後にプロポーズされた。服部も和葉ちゃんにプロポーズし、結婚する予定だという。快斗は自分が追つっていた黒の組織の兄弟組織を倒し、パンドラが含まれた宝石を見つけ出す事ができ、パンドラを悪用されないように破壊した。それによつてもう怪盗キッドをする必要もなくなり、2ヶ月後青子ちゃんにプロポーズしたらしい。オレと哀は、解毒剤で工藤新一と宮野志保の姿に戻り、江戸川コナンと灰原哀は転校という形で米花町から消滅した・・・。そして1年後・・・。そして1年後・・・。その途中だった。

夏の日の米花町を、新一と志保が歩いていた。新一は帝丹高校に復帰し、志保も新一に説得されて帝丹高校に転校した。2人がつき合つてゐる事は園子がクラスメイトに言いふらしたらしく、2人は登校のたびにクラスメイトに冷やかされていた。今日は夏休み最後の日・・・2人は7月中に夏期休暇の宿題を終わらせ、毎日デートを楽しんでいた。今日はトロピカルランドに遊びに行く予定で、今はその途中だった。

志保「ねえ新一君、新一君の初恋の人ってどんな人だったの?やつ

ぱり蘭さん？」

志保は新一に初恋について聞いてきた。

新一「初恋の人か・・・期待してるトコ悪いけど蘭じゃないぜ？」

志保「蘭さんじゃないんだ・・・じゃああの内田麻美さんは？」

新一「園子に聞いただろ？あれは麻美さんがオレにホレてたんだよ・

・・

志保「じゃあ、あなたの初恋の人って誰なのよ～？」

志保は新一にズイズイと近寄つてくる。

新一「あーもう、わかつた！教えてやるよ～その代わりオマエも教えろよ？」

志保「うん、いいよ！」

志保の反応はとてもカワイいらしく、新一は思わず見とれてしまった。

新一「オレの初恋の人・・・その子は名前も知らないカワイイ女の子だつたんだ・・・アメリカで出会つて、何度かデートして・・・事件にも巻き込まれて・・・その子を助け出して、キスを1回だけして・・・結局その子にはオレの気持ちを伝えられなかつたんだ・・・」

・・

志保「私の初恋の人・・・その子は活発で、やさしい男の子だつたわ・・・本名も知らなくて、ずっと愛称で呼んでた・・・何度かデートもしたつけ・・・私が事件に巻き込まれた時、その子は危険もかえりみず私を助けてくれたの・・・1回だけキスをしたけど、結局その子には気持ちを伝えられなかつたつけ・・・」

新一と志保は初恋について教えあつた後、まさか・・・という顔をしていた。

話は3年前にさかのぼる・・・。

アメリカ・・・ロサンゼルスの公園に、1人の少年と2人の大人が

来ていた。上藤優作とその妻有希子、そして2人の息子の新一である。14歳の新一はサッカーボールを片手に、早くサッカーがしたいよとはしゃいでいた。すると新一の眼前に、1人の少女が写った。赤みがかつた茶髪のウェーブヘアのその子こそ、富野志保……しかし、この時はまだお互いの名前を知らなかつた。

新一「母さん、ボクここでサッカーしてるね!」

有希子「いいわよ、新ちゃん!私はこの人と散歩に行つてへるから。」

・

優作と有希子が去つていくと、新一は志保に歩み寄つた。

新一「こんにちは!」

志保「あ、こんにちは・・・」

新一の挨拶に志保は少し驚いたが、すぐに落ち着いて彼に話しかけた。

志保「こんにちは!あなたサッカーをしにきたの?だつたら私が相手になつてあげるよ!」

新一「ありがとーー君の名前は?」

志保「わ、私の名前は・・・今は言えないの・・・」

新一「そう・・・じゃあ、アイちゃんつてどう?」

志保「アイ・・・ちゃん・・・?」

新一「君の瞳、とってもキレイでカワイイでしょ?だからEYEEでアイちゃん!」

志保「へー、あなた英語ができるんだ・・・カワイイ名前だわ。ありがと、シン君!」

新一「シン・・・君・・・?」

志保「さつき、あなたの母親が、「シンちゃん」って言つてたでしょ?だからシン君!」

新一「君もいいセンスしてるね。じゃあ遊び!アイちゃん!」

志保「いいよ、シン君!」

初対面にもかかわらず、新一と志保は友達のように仲が良かつた。

さて、ここからは話の都合上（つーか作者の考へ？）、「シン」と「アイ」でいく事にする。

シン「アイちゃん、サッカー上手だね！…とても初めてとは思えないよ！」

アイ「シン君の教え方がうまいからよ…」

それから数時間後…。

シン「あ、もうこんな時間だ！ボク今日は帰るよ。」

アイ「明日もここで待ってるね、シン君。」

シンは宿泊先のストーンブリッジ・ホテルの1人部屋で、アイの事を考えていた。

シン「アイちゃん、カワイかつたなあ…・・・も、もしかして、これが初恋つて事なのかな？」

同じ頃、アイもホテルでシンの事を考えていた。

アイ「シン君、かつこいいしスゴくやさしいなあ…・・・も、もしかして、これが初恋なの？」

次の日も、その次の日も、シンとアイは仲良く遊んだ。そしてある日、それぞれの夢について語り始めた。

アイ「ねえ、シン君は、大きくなつたら何になりたいの？」

シン「ボクは、大きくなつたら探偵になる・・・そして、推理小説

家の父さんに負けないような名探偵になるんだ！アイちゃんは？」

アイ「私は、大きくなつたら科学者になる・・・そして、お父さんが開発していた薬を完成させて、世界の人々を救えるような研究をするんだ！」

シン「アイちゃんなら、きっとなれるよ！」

アイ「ありがと…シン君も絶対なれるわ…」

シン「そうだアイちゃん、これあげる…」

アイ「シン君、これは何…」

シン「どんなピンチも乗り越えられるお守りだよ…」

アイ「ありがと、大事にするわ…」

そして、何日か過ぎたある日、事件は起じた。

今日はシンが日本に帰る日。アイはいつも公園に向かうため、やや早足で走っていた。

アイ「今日シン君が帰っちゃうんだよね。今日この機会を逃したら、きっと後悔する…私の気持ちをシン君に告白しなきゃ…」
アイは近道をするため、路地裏に入り込んだ。しかし、そのアイを背後から見張っている男がいた。

シンは公園で、アメリカの新聞を読みながらアイを待っていた。

シン「アイちゃん遅いなあ…今日ボク帰っちゃうから、ボクの気持ちをアイちゃんに伝えておかなきや…ん？」

シンが目を付けたのは、ある事件の記事だった。

シン「なにに、女子高生連続誘拐殺人事件…ああ、父さんがラディッシュ警部に捜査の協力を頼まれた事件か…まだ捕まつてなかつたんだ犯人…ついに15人目の犠牲者が出た、か…・そういうえば、アイちゃん遅いなあ。あれを使ってみるかな…」
そう言つと、シンはあるモノのスイッチを入れ、走り出した。

シンが走り出した頃、アイはある部屋で田を覚ました。

アイ「ん…うう…頭がクラクラする…どうして私、こんな所に…? そうだわ、確か近道しようとして路地裏に入った

時、後ろから口を塞がれて・・・そうしたら、突然眠くなつて・・・

アイは意識を取り戻すと、体を縄で縛られている事に気づいた。足も縛られている。

アイ一うう、ダメ・・・動けないわ・・・」
しばらくすると、男が部屋に入ってきた。

しばらくすると、男が部屋に入ってきた。

誘拐犯「目が覚めたよ」たね、お嬢ちゃん……君には悪いけど
金をいただくための人質になつてもらうよ……」

!

男はアイが声を出せないように、口にガムテープを貼り付けた。

誘拐犯 一 さて、電話をかけるか・・・この子なら1000万は取れる・・・運んできたヤツも捕まえて、どこかで始末すれば終わりだ・

卷之三

~~~~~ ! ! )

その時、部屋のドアが吹っ飛んだ。

説撰狐  
た  
誰だ  
！  
！  
！

シン「1000万どころか、一円だつてオマエの手には入らないよ、おじさん！ いや・・・女子高生連続誘拐殺人犯つて呼んだ方がいいのかな？」

その声にアインは聞き覚えがあるたゞ、そこへ部屋に入り込んできたのは・・・。

アイ（シ、シン君！！）  
アイを助けに来たのは、シンだった。

誘拐犯「バカなヤツだ、オマエも人質にしてやる……。」  
誘拐犯がシンに飛びかかるうとする。

アイ（シン君 危なし！！！）  
シン「知つてる？おじさん。サッカー ボールつて・・・当たると結

構イタいんだぜ！－！」

そう言つと、シンはサッカーボールを蹴り飛ばした。ボールは男に当たり、男はあえなく吹っ飛ぶ。シンはアイに駆け寄ると、ガムテープと繩を解いた。

シン「アイちゃん、大丈夫？」

アイ「シン君！ありがとう！」

アイは思わず、シンに抱きつきキスをしてしまつた。シンはそんなアイを抱きしめる。

その後、シンの通報で駆けつけた警察により、男は逮捕された。しかし、アイもシンも結局自分の気持ちを伝える事はできなかつた。そして時は流れ、2人は再会した……。

新一「そうだつたんだ……オレの初恋の人はオマエだつたんだよ、アイちゃん！」

志保「やつと再会できたのね……私の初恋の人、シン君……！」

2人は抱き合い、熱いキスを交わした……。

新一「志保……」

志保「なあに？新一君……」

新一「明日大事な話があるから……逃げるんじゃねえぞ……」

志保「わかってる……逃げたりはしないわ……」

夏休みは終わり、新学期が始まった。

クラスメイトA「よお、工藤！新学期早々夫婦で登校かよ？」

クラスメイトB「ピューピュー！」

新一「バーロー、なんなんじやねえよ……」

新一と志保は一緒に登校したため、またもクラスメイトに冷やかされた。

クラスメイトC「そういえば、あのジョディ先生、また戻ってきたんだつてよ……」

新一（あのゲーマー先生……何しに戻ってきたんだ……？ヤケに人気高かつたからな……）

志保「ちょっと……私まだあの話、聞いてないんだけど……」

新一「……話？」

志保「ホラ、何か大事な話があるって言つてたでしょ？」

新一「ああ、その話なら……」

新一は志保に近づき、小声で話す。

新一「あんな……ボソボソ……」

志保「……え？」

新一「え……」

案の定、みんなに聞かれてしまつていて。

新一「オマエらなあ……人の話を盗み聞きしてんじゃねえ……！」

クラスメイトD「あ、助けて奥さーん！」

クラスメイトE「ダンナが暴れています……！」

志保（……今夜8時、米花センタービル……展望レストラン？）

夜8時……新一と志保は、タクシーから降りて米花センタービルに向かつた。新一は、何かの小箱を上着に入れて……。

志保「ちょっと大丈夫なの？ここ高そうよ？」

新一「心配すんなよ、父さんのカード持つてきたから……」

志保「この道楽息子……！」

新一「バーロー……息子ほつたらかして外国に行つてる親の方が、よつぽど道楽だよ……！」

新一と志保は、1年前の新一・蘭とまったく同じ会話をしている。（詳しくは単行本26巻参照）

志保「それで？何なの話つて……」

新一「あ、ああ……話つてのは……」

志保「……ん？」

新一「は……話つてのはな……」

同じ頃、また血塗られた殺人劇が幕を開けようとしていた。・・・。

志保「へー、たつたそんな事で見抜いちゃうなんて、やっぱりホー  
ムズつてスゴいんだ！！」

新一だろ?』

新一は相変わらずホームズの話をしている。志保も黙つて聞いてはいるが。

志保 「… で? 話つて何なのよ?」

新 は ある。

志保、まーつたぐ、言いにくいのはわかるけどさあ・・・男なら男らしくハッキリ言いなさいよ・・・」「

志保「寝てて聞いてなかつた授業のノート見せてくれつて！！」

「…」

志保「やつぱりー！！

この2人、漫才二三郎のは変わらぬよ二た。その静寂を破二たのは新一だつた。

新一「…・つて、んなワケねーだろー！」

志保 ー・・・え?

志保「・・・！！」

新一「つ、つまり・・・それは・・・」

新一の志保の静寂を、1つの悲鳴が破つた。

アアアア～～～～～～ツ！――」

志保「な、何？今の悲鳴・・・」

新一「どうせ誰かがゴキブリでも見つけたんだろう？気にする事は・・・」

・「おい、大変だぞ！エレベーターの中で人が死んでるつてよ！――」

「警察は呼んだのかよ！？」

新一「あ、だからオレが話したかったのは・・・」

「拳銃だ拳銃！！会社の社長が頭を撃ち抜かれてるらしいぜ！――」

新一「つ、つまりだな・・・」

志保「・・・ムリしちゃつて・・・」

新一「・・・え？」

志保「事件の事が気になつてしようがないクセに・・・」

新一「いや・・・」

志保「私は誰かさんと違つて、逃げも隠れもしないから、さつさと行つてきなさいよ・・・探偵さん？」

新一「・・・」

志保「ほーら！私の気が変わらないうちに行つた行つた！――」

新一「し、志保・・・悪いな・・・すぐ戻つてくるからよ！――」

そう言つと、新一は走つていつた。志保はそんな新一を微笑みながら見ていた。

現場では、目暮警視と高木警部が現場検証をしていた。新一は2人に合流した。

新一「目暮警視！――」

目暮「おお、新一君じゃないか！久しぶりだな！――いつ警視庁に配属だ？」

新一「来年高校を卒業して、しばらく落ち着いてからこする予定です・・・」

そう、新一は警視庁捜査一課に配属される事が正式に決まつてている

のだ。目暮としては、優秀な新一には一日も早く来て欲しいというのが本音だつたりする。

新一「高木警部も元気そつで何よりです！佐藤警部は？」

目暮「佐藤君は、赤ん坊の世話で休暇を取つておるよ……」

新一「え？ それつてまさか2人の……？」

そう、高木と佐藤は去年結婚して、今年子供も生まれていたのだ。あの時はみんなで2人を祝福したつけ。陰で白鳥警部が号泣して、それを由美さんがなぐさめていたけど……。

新一「そういうえば、小五郎さんはどうします？」

目暮「毛利君かね？ 捜査一課に戻つてきたよ……君がコナン君だつた時の指導が効いたらしくてな、次々と難事件を解決しておるよ……」

子が生まれたそうだよ……」

新一「え？ あの年齢で……？ ハハハ……」

高木「しかしどうして君がここに？」

新一「志保と2人で食事してたんですよ……」

目暮「まったく……高校生2人がこんな高級レストランの連なるフロアで食事とは時代も変わつたモンだ……」

新一「いえ、ここにしたのは……ちょっとワケありでね……」

新一はそう言いながら、現場の捜査に加わつた。

同じ頃、志保は新一の「大事な話」についてあれこれ考えていた。

志保（何だろ……新一君が私に大事な話つて……何かしら？……もしかして……）

新一「オマエ、この夏休みの間に太つたんじゃねえか？」

志保（あ、あらうる……最近ちょっとウエスト、ヤバきみだし……でも、わざわざ食事に誘つてそれはないわよねえ……）

志保がそんな事を考えていると、ウエイトレスがデザートを運んできた。

「お待たせしました・・・」

志保「あ、連れが戻つてくるまで、デザート待つともうります？さつきの悲鳴聞いて飛んで行つちゃったんです！でも彼、探偵で、たぶんすぐに解決して来ると思いますから・・・」

「ウフッ！－かしこまりました・・・」

志保「・・・え？何ですか？」

「あ、ごめんなさい・・・前のソムリエに聞いた伝説のカッブルにあなた達があんまりそつくりだつたから・・・席もちょうどこのテーブル・・・もう20年ぐらい前の話だそうだけど、その20年前の彼も探偵でね・・・事件を解いて戻るなり大声で言つちゃつたらしいから・・・あなたも覚悟しておいた方がいいわよ！－！」

志保「・・・言つちゃつたつて？」

「プロポーズよ！プロポーズ！－！」

志保「・・・えつ！？」

「じゃあ、がんばつてね！－！」

志保（プロポーズウ？ま、まさか・・・まさか新一君・・・）

同じ頃、新一はトリックを暴き、犯人を割り出していた。

新一「・・・以上の点から考えて、被害者を射殺したのはあなたしかいりませんよ！－！」

「負けました・・・全てあなたの推理通りです・・・」

犯人は警察に連行されていった。

目暮「いやあ、相変わらず頼もしいねえ、君は！－！」

新一「いえいえ・・・」

目暮「どうかね？久しぶりに被疑者の事情聴取に立ち会わんか？」

新一「いや、ボクは遠慮しておきます・・・まだ、ヤボ用が残つてますから・・・」

目暮「そうか・・・じゃあ行くか、高木君！－！」

高木「はい！」

新一「さよなら、田暮警視、高木警部！－！」

田暮「志保君にようしな－－！」

田暮と高木が去つた後、新一は志保の元へと走り出した。

「ねえ、聞いた？事件解決したらしいわよ－！」

志保「え？ホントですか？」

「いよいよ会えちゃうわね－－あなたの彼に－－！」

志保「アハハ・・・そんな・・・」

その時、新一が走つてきた。

新一「志保！－！」

志保「し、新一君！－！」

新一「待たせたな、志保・・・」

志保「そんな・・・大丈夫、ちゃんと待つてたよ・・・」

新一「志保、オマエに話がある－－！聞いてくれ－－！」

志保「は、はい！－！」

新一はそう言ひと、上着から小箱を取り出した。

志保「これつて・・・」

新一「これ・・・結婚指輪なんだ・・・」

志保「結婚・・・指輪・・・」

新一「志保！－！オレは・・・オマエの事が大好きだ！－－この地球上の誰よりも・・・だから・・・志保・・・オレと・・・オレと結婚してくれ！－！」

新一は、20年前の探偵と同じように、大声で志保にプロポーズした。その言葉に志保は、目を涙でいっぱいにして答えた・・・。

志保「はい・・・喜んで・・・－－！」

新一と志保は、ついに結婚する事になった。

志保「あ、そうだ新一君－デザート食べるでしょ？」

新一「あ、おう！」

志保「あ、すみません！メニューを……」

新一と志保は、運ばれてきたデザートを食べている。

志保「へー、たったそれだけの証拠でトリックも犯人も見破っちゃうなんて……やっぱり新一君ってスゴいんだね……」

新一「あ、ああ……まあな……（オレ達これで7品目だぞ……）」

ちなみに食事の支払いは、全部優作である。（カードが優作の物なので……）

志保「ところでさ、どうしてこんな高い店にしたの？ちゃんとした理由があるんだよね？」

新一「あ、ああ……それは……」

志保「まったく……言えないなら私が言つてあげよっか？」

新一「へ？」

志保「この席は、20年前に優作さんが有希子さんに告白した場所……なんでしょう？」

新一「ああ、そうだよ……博士に聞いたなあ？」

志保「テヘッ、バレたか……父親のゲンをかついだつてワケね……ちなみにさつきの告白のセリフも、小五郎さんが英理さんにプロポーズした時のマネなんでしょう？」

新一「ゲッ！なんで……？」

志保「これは本人から直接聞きました！」

新一「ニヤロー……」

志保「テヘヘ……」

新一「志保、口開けろ！オレが食べさせてやつからよ！」

志保「んもう……その代わり、私も食べさせるからね！」

新一と志保の談笑は、遅くまで続いた。そして、この席はのちに、

「伝説のカップルのテーブル」と呼ばれ、ここで食事した恋人達は必ず結ばれるという伝説が受け継がれる事となる……。

## 初恋の人・・・そして未来へ（後書き）

どうも、ユーリです。今回はエピソード4と5のネタバレを書こうと思います。

エピソード4では、雷薙との戦いでベルモットが死んでしまいましたね。まあ、忍者の末裔と戦つて勝てるわけがないのは私もわかつてたんですが・・・

書きそびれましたが、エピソード3ではウォッカが死んだ事によつてジンが涙を流すシーンを書いてみました。冷酷な彼も、やっぱり人の子なんだなあと・・・

雷薙に詰め寄られてふるえているジンのシーンを書いた時は、書きながら爆笑していました。

瑛祐が元不良だつたという設定も私が入れました。  
ロズゴート・バリーとヴィンセント・キース。この2人の名前は、考えるのが大変でした。

新しく出てきたギムレットとは、ジンをライムで割りショーケしたカクテルです。

コナン「いろいろあつたな。」

哀「私達はまだ捕まつていてるのね・・・ハア・・・」

ベルモット「それより、どうして私が死んじゃうわけ?」

キヤンティ「なんか、アタイ達も次回死んじやうみたいだわ。」

コルン「出番・・・少ない・・・オレ・・・悲しい・・・」

キヤンティ「アンタに「悲しい」って感情があるとは思わなかつたよ。」

コルン「キヤンティ・・・しばく・・・」

キヤンティ「じょ、冗談だよー。コルン・・・」

次はエピソード5・・・戦いが終わつたのに、なんなんでしょう?この寒さは・・・?

コナン「たくさん人が死んだな。」

哀「そうね。いつの世も戦乱はなくならないのね・・・といひで、あなた何を持つてるの?」

つたんだ。

哀すま、まさか・・・」

「ナン、「氣づいたか。オマエに」れを飲ませるんだよーー。」

「ナハ、うべ、うべ、言わすに飲め~~~~~！」

ます。

## 娘と息子へ・・・受け継がれる魂

オレと志保は帝丹高校を卒業後、6月に結婚した。式には多くの関係者が詰めかけ、2人を祝福してくれた。そうそう、服部と和葉ちゃん、園子と京極さん、快斗と青子ちゃんはすでに結婚して、子供も生まれたらしい。そして、オレと志保にも子供が生まれた・・・。

17年後・・・

？？？「雷斗！学校に遅れるわよ！」

雷斗「わかつてるよ、哀姉・・・」

志保「哀蘭、雷斗！いってらっしゃい！――」

哀蘭・雷斗「いつてきまーす！――」

新一「たく、なんで双子でいつも違うんだ？哀蘭は活発でおてんばなのに、雷斗はおとなしくてよく寝坊するし・・・」

志保「あら、双子だからって同じ性格とはかぎらないのよ？あの子達は一卵性だもの・・・」

新一「志保、邪魔者もいなくなつた事だし、キスしようぜ!？」

志保「んもう、あなたつていつもそうーまあ、そんなトコにホレたんだけどね・・・」

新一と志保は、朝のキスをしていた。

今米花町を軽快に走っている少女と、遅れ気味でハアハア言つている少年・・・そう、この2人こそ、新一と志保の子供、双子の少女と少年だ。

少女の方は工藤哀蘭（クドウ アイラン）、17歳。活発なおてんば娘で、空手部女主将、そして今や新聞紙上を騒がせている女子高生名探偵だ。名前の由来

は、新一と志保が蘭の事を忘れないためにと、哀とくつつけてつけた名前だ。赤みがかつた茶髪のウェーブヘアーナど、どことなく志保の特徴を引き継いでいる。滅多に涙を流さず、並の男子なんて軽々とやつつけてしまう。

少年の方は工藤雷斗（くどう ライト）、同じく17歳。姉と違つておとなしくてスゴい泣き虫で、拳げ句の果てにはネボスケときてる頼りない弟。でもそのひ弱さを、姉に教わつた空手と剣道で補つてゐる。推理力の方も姉に引けを取らないが、感情に流されると暴走推理をしてしまうのが玉にキズ。名前の由来は、風魔雷薙と黒羽快斗をくつつけた名前だ。

ちなみにその雷薙はどいつもく、早くに出所でき、今は工藤家の家政婦を務めている。

さて、話を本題に戻そう。さつき志保は遅れると言つたが、実は今のは9時15分前。2人の足なら、近い帝丹高校になど樂々着けるはすだが、なぜか哀蘭達は走つていた。その理由とは、今日は帝丹高校の始業式だつたからだ。哀蘭はクラス分けを楽しみに、急いでいるのである。

雷斗（たく、クラス分けでいちいちはしゃぐなつての……）

哀蘭「なにか言つたかなあ、雷斗おー？」

雷斗「（ゲッ！）な、何も言つてません……」

雷斗は心の中で、なんでバレたんだ?と思つた。実は哀蘭は耳が良く、絶対音感を持つてゐるのだ。そして、雷斗が何か考え方をしていふと微妙な音でわかつてしまつらし。地獄耳だといえ、わからやしいだろ?つまり、哀蘭には雷斗の考え方などお見通しなのだ。

帝丹高校に着いた2人は、さつそくクラス分け発表の掲示板を見た。

哀蘭「あ、あつた！アタシの名前！クラス落ちはしてないわね。」

雷斗「ゲツ・・・また姉ちゃんと一緒だ・・・ま、しょうがねえか・・・」

そこに書かれていた名前は、哀蘭と雷斗、平次と和葉の子供の服部祐次と服部紅葉、快斗と青子の子供の黒羽弥生と黒羽北斗、白馬探と小泉紅子の娘の白馬朔美、桃井恵子の息子の桃井桂太、真と園子の子供の京極大和と京極撫子、高木と佐藤の息子の高木拓人・・・。そして、もう1人、なつかしい名前が・・・。

哀蘭「おつはよー！」

服部祐次「おう、待つとつたで哀蘭ちゃん！！」

哀蘭「あら、アタシを待つててくれたの祐次君？」

服部紅葉「そうなんや哀蘭ちゃん！祐次つてば朝早うから哀蘭ちゃんに会える哀蘭ちゃんに会えるゆうて・・・うるそーてかなわんわ・・・」

黒羽弥生「それだけ祐次君が、哀蘭ちゃんを好きだつて事よー！」

黒羽北斗「そうそう！お似合いのカツブルだし！」

哀蘭・祐次「／＼／＼・・・／＼／＼／＼

京極大和「おやおや、妬けますね・・・」

京極撫子「ちやかさないちやかさない！」

白馬朔美「あらあら、2人共耳まで真つ赤つか！」

桃井桂太「この2人つて昔つからこうだよねー。」

高木拓人「すぐ顔に出て照れちゃうから、からかいがいがあるんだよねー。」

哀蘭・祐次「／＼／＼／＼うう・・・／＼／＼／＼

なぜこの11人以外の人が会話に入つてこないのか？それは簡単である。哀蘭達が今いるこの教室は、英才教育の特別学級で、12人しか入れないエリートコースだからだ。しかもこの11人、小学校の時からずつと同じクラスで、一度も離れた事がないのである。それだけにこの11人は、強い絆で結ばれているのだ。

「席に着け！出席を取るぞーーー！」

教室に担任が入ってきて叫ぶと、11人は慌てて席に座る。

「今日はオマエ達に、新しいクラスメイトを紹介するーーーさあ、自己紹介をしてくれーーー！」

毛利揚羽「皆さん、初めましてーーーアタシ、毛利揚羽と言いますーーーな

じめるかはわからないけど、仲良くしてくださいねーーー！」

揚羽の自己紹介に、哀蘭達は歓声を上げ快く仲間に引き入れた。そして、彼女達が揚羽を呼び込み、帝丹高校少年探偵団として活躍するようになるのは、まだもうちょっと先の話・・・。

「黒の組織との決戦ーーーそして・・・」完

# 娘と息子へ・・・受け継がれる魂（後書き）

・・・  
ああ・・・やつと終わつた・・・長かつた・・・こんなに長いのを  
書いたのは久しぶりです。それでは、いよいよラストのネタバレを・

エピソード6では、新一と志保のそれぞれの初恋から始まりました。前に2人が会つていたら……という感じで書いたモノです。

らなんでもないだろ」と思いましたが、話なのでその方が面白いか  
と・・・

「ナン、「哀。。。大丈夫か?」

「ナニ」「ヤベ、志保のヤシ酔つてやがる……」  
哀一私は志保よ~~~~~新~~~~~・・・  
「」

わざ、いよこよラストです。ここまで来たら、もはや語のモノはな  
いでしょう。

本当にありがとうございました!!!!  
感想もぜひ聞かせてくださいね!!!!

回想シーン・・・コナンと哀の正体は、なぜバレたー？

『ジン……オマエの無能ぶりには、ほとほと愛想が尽きた……』

『黙れ！！もう終わりだ……わが世だ、シン……』

ドナツ・・・。

ジン「う・・・うわああああああああああああああああああああ

ジノサマ、アーベルゼー、アーヴィング。

ジン「ハアハアハア・・・・夢

アーティスト・エイドの?シン::::、「

シンの隣で、風魔雷羅」ルバーセットエヒーが、目を覚ました。

アーティスト「また夢につながれてたの？」

シン・ああ・・・失敗をあの方にとかめられ、射殺される夢た・・・

アーネスト「大丈夫? アタシにできる事があつたら、何でも言って。

「… そんがな し あ 田舎には いづれ てくれないか ？」

アーベット「あら、いいわよ。」

翌日の夜、ジンと雷薙は杯戸シティホテルのレストランにいた。ジンはパスタを口に運びながら、雷薙に話しかける。

ジン「アーベット、研究は進んでいるのか？」

アーベット「ええ、もうAPTX4869の完全品「パンドラ」は完成させたわ・・・ところで、ジン。行方不明になっている工藤新一君とシェリーちゃんの事なんだけどね、調べてみたら、彼らがパンドラの実験台にふさわしい人間だつて事がわかつたのよ・・・」

ジン「本当か！？」

アーベット「ええ。データはそろつてるわ。」

ジン「あとは、本人達が見つかればいいのだがな・・・」

アーベット「・・・ん？ねえ、見て、ジン！あれ！！」

ジン「どうした、アーベット？あ・・・」

ジンが向いた方向には、メガネをかけた少年「江戸川コナン」と、茶髪でウェーブヘアの少女「灰原哀」、そして3人の大人の男女の姿があった。どうやら、5人でここに食事に来ていたようである。

ジン「アイツらは・・・子供・・・か？」

ジンはこつそりコナンと哀の写真をカメラで撮ると、雷薙と共にその場をあとにした。

組織に戻った2人は、さつそくある事をやり始めた。それは・・・カシャツ、カシャツ、カシャツ・・・。

雷薙はノートパソコンを開き、指を動かしていた。しばらくして・・・

アーベット「出たわ、ジン。組織のデータベースの、構成員のデータ

タ。」

ジン「それで、どうだつた・・・？」

アニゼット「完全に一致ね。あの茶髪の少女は、ショリーだわ。」

ジン「やはりそうだつたか・・・ならば、もう一人のあの少年は・・・」

雷薙は続いて、被験者のデータを調べてみた。数秒後、笑みを浮かべる。

アニゼット「こちらも一致。あの少年は、高校生探偵の工藤新一よ。」

ジン「信じらるんが、これが事実か・・・」

アニゼット「彼らも、まさかアタシ達に写真を撮られていたとは微塵も思つてないでしょうね。小学生生活が長引いて、警戒心がなくなつたのかしら?」

ジン「あるいは、オレ達に絶対勝てるといつ自信があるからなのか・・・」

アニゼット「でも、それじゃあアタシ達からは逃れられないわね。ジン、ナイトクラスを全員集めて。作戦会議をするわよ。」

数分後、ジンと雷薙の周りに、ベルモット、ウォッカ、シードル、バー・ボン、ボルドー、キュラソー、アマレット、コルン、キャンティ、ギムレット、マンハッタン・・・黒の組織のナイトクラスが、全員集合していた。

雷薙「みんな、よく聞いてね・・・」

ジン「今から、「工藤新一とショリー・永遠の人質計画」の作戦を発表する・・・」

それから数日後、黒の組織はコナンと哀を誘拐し、アジトにしている聖学院高校に連れてきた。コナンと哀は両手足をロープで縛られ、口をガムテープで塞がれている。

コナン・哀「うーん、うーん……」

力なくもがいている2人を見て、ジンはフツとほほえんだ。

ジン（工藤新一とショリー……）「コイツら、こんなにかわいらしい顔をしているとはな……フフフ……お似合いのカップルだよ、お2人さん……」

ウォッカ「アニキ、運ぶ役は誰にしますか？」

ジン「ああ、アマレット達でかまわんだろ。」

アマレット達はコナンと哀を抱え、牢屋に連れて行った。

ジンは1人、自分の部屋でうつむいていた。

ジン「なんで、アマレット達に任せてしまつたんだろう……本當はオレがあの2人を運びたかった……ここに連れ込んで、一緒に遊びたかったのになあ……ハア……」

後悔先に立たず。ジンは、ハアーツとため息をついた。

ジン「しかたない……アニゼットを呼ばう。」

ジンは雷薙を部屋に呼び、ポーカーをした。

アニゼット「2人でポーカーって、あまり盛り上がりらないものね。」

ジン「そうだな。あ、そうだアニゼット。2人に食事を持って行ってくれ。」

アニゼット「ええ、じゃあアタシが今から作つて……」

ジン「イヤ、もう料理はできている。」

アニゼット「まさか、あなたが作ったの？」

ジン「悪いが？」「

アーベット「悪くないわよ。あなたって、なぜか料理は得意だものね・・・」

ジン「あ、そうそう、あの2人には、オレが料理を作った事はふせておいてくれよ。」

アーベット「はいはい・・・」

雷薙は2人分の食事を持って、コナンと哀が閉じ込められている牢屋に歩いていった。

アーベット「ジン・・・気合い入れすぎよ・・・」

雷薙はため息をついた。ジンの作った料理は、かなりの量だったからだ。

アーベット「あの子達、食べきれるかしら・・・」

雷薙は2人を心配したが、その心配は全くなかつた。

コナンと哀は、数分で全部食べてしまったのだ。

雷薙が牢屋を出ようとした時、コナンと哀の声がかかつた。

コナン「雷薙さん、この料理、すごくおいしかったよ!」

哀「誰が作ったのかわかんないけど、プロ並みだわ!」

雷薙「そ、そう・・・(絶対作成者の名はバラせないわね・・・)」

こんな事を考えながら、雷薙はジンの部屋に向かつた。

その頃、同じナイトクラスの面々は、それぞれの部屋でくつろいでいた。

バー・ボン「シードル・・・」

シードル「バー・ボン・・・」

シードルとバー・ボンは、仲良く寝ていた・・・

マンハッタン、ギムレット、キュラソーは、屋上にいた。

マンハッタン「そうか・・・毛利小五郎も来るのか・・・小五郎・・・明日こそ死体にしてやるぜ!!」

ギムレット「まあせいぜいがんばってくださいね、マンハッタン。一応エールは送ります。」

マンハッタン「ギムレット・・・オマエ・・・第1作戦のメンバーに選ばれなかつた事、怒つてるらしいな。しかし今のオマエならアマレット達など・・・」

ギムレット「アタシ、怒つてません。」

キュラソー「大丈夫よマンハッタン、ギムレットーあんなヤツら、楽勝だから!!」

マンハッタン・ギムレット「・・・」

キャンティとコルンは部屋で食事、アマレットは携帯ゲーム、ボルドーは宝箱鑑賞、ベルモットとウォッカは部屋で寝ていた。

そして翌日・・・最終決戦は始まつたのだった・・・

たぶん、これでオシマイ。

回想シーン・・・「ナンと哀の正体は、なぜバレた!?(後書き)

・・・・・なんか、この話の回想シーンです。

たぶん、これで終わりのハズですが・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4629a/>

---

黒の組織との決戦！！そして・・・

2010年11月5日21時53分発行